# 延勝寺湖底遺跡発掘調査報告書

1985

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

# 序

琵琶湖の湖辺には数多くの遺跡の存在が知られております。これらの遺跡はいにしえ人の英智の結集であり、現代に住む我々の生活にも多くの示唆を与えてくれるものであります。昭和59年度に海老江と今西に狭まれた延勝寺村の地先に湖岸堤管理用道路の建設が予定されたところから水資開発公団と協議し、発掘調査を実施いたしました。本書はその調査成果を収めたものであります。今回の調査が、いにしえ人の生活環境と現代の生活環境との相違を考える上で幾分かでも寄与するところがあれば幸いであります。

最後に、調査関係者の尽力に対し、厚く感謝いたします。

昭和60年３月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課長

市　原　　浩

# 例　　言

1．本書は、水資源開発公団の実施する湖北町延勝寺地先の湖岸堤管理用道路建設に伴う、延勝寺湖底遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、「湖岸堤管理用道路(延勝寺工区)建設に伴う埋蔵文化財試掘調査」として、水資源開発公団からの委託（5,433,000円）を受けて、滋賀県が実施した。

3．調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、滋賀県文化財保護協会技師奈良俊哉を主任調査員に得て実施した。

4．調査・整理にあたっては、以下の諸氏の参加と協力を得た。

大柳仁司、丸岡寛、渡部俊哉、山田勝彦、赤山佳宏、白江人智、松林宏典、奥谷聖子、佐々木尚子、森澤史（関西学院大学考古学研究会）、前角和夫（奈良大学）、寿福滋（遺物写真、空中写真）

5．本書は、奈良俊哉が執筆した。

6．調査実施にあたっては、地元湖北町教育委員会ならびに同委員会技師山崎清和氏から格別の配慮を賜った。記して厚くお礼申しあげたい。

# 目　　次

序
例　言
第1章　はじめに ……1
第2章　位置と環境 ……2
第3章　調査の経過 ……4
第4章　調査の結果 ……5
(1)　A地区の調査
(2)　B地区の調査
(3)　C地区の調査
(4)　石垣の調査
第5章　出土遺物……15
(1)　土　器……15
1　C地区
2　石　垣
(2)　木製品……17
(3)　鉄製品……17
第6章　結　語……18
(1)　調査のまとめ……18
(2)　湖北における弥生時代前期の遺跡……19

# 図 版 目 次


図版一　遺跡位置図

図版二　トレンチ配置図

図版三　土層断面図

図版四　遺跡周辺全景

図版五　延勝寺遺跡全景

（上）　昭和58年10月撮影

（下）　昭和59年11月撮影

図版六　A地区

（上）　A地区近景

（下）　A地区第3トレンチ（北より）

図版七　A地区

（上）　A地区第5トレンチ（北より）

（下）　A地区第7トレンチ（北より）

図版八　B地区

（上）　B地区墓地

（下）　B地区石垣西面

図版九　B地区

（上）　調査風景

（下）　B地区第6トレンチ（北より）

図版十　C地区

（上）　C地区第1トレンチ礫群調査状況

（下）　C地区第1トレンチ（南より）

図版十一　C地区

（上）　C地区第5トレンチ（南より）

（下）　C地区第6トレンチ（南より）

図版十二　C地区遠景

（上）（南西より）
（下）（北西より）
図版十三　C地石垣トレンチ
（上）　C地区西面石垣裏込の状況
（下）　C地区南面石垣裏込の状況
図版十四　B地区採集礫
（上）　B地区第2トレンチ採集
（下）　B地区第5トレンチ採集
図版十五　C地区出土遺物
（上）　鉄　鏃
（下）　柱　根
図版十六　C地区出土遺物
（上）　C地区第1トレンチ出土土器
（下）　C地区第2トレンチ出土土器
図版十七　C地区出土遺物
（上）　C地区第2トレンチ出土土器
（下）　C地区石垣出土土器
図版十八　C地区出土遺物
（上）　C地区石垣出土土器
（下）　C地区石垣出土土器
図版十九　C地区遺物出土状況
（上）　C地区第1トレンチ鉄鏃出土状況
（下）　C地区第4トレンチ柱根出土状況
図版二十　C地区石垣
（上）　北隅（北より）
（下）　南隅（南より）
図版二十一　C地区石垣
（上）　北　面
（下）　南　面

# 挿 図 目 次

第1図　周辺遺跡公布図 ……2
第2図　C地区出土弥生式土器実測図……15
第3図　陶製火入れ実測図……16
第4図　須恵器実測図……17
第5図　C地区出土鉄鏃……18
第6図　雁股鏃(「貞丈雑記」より) ……18
第7図　湖北における弥生時代前期の遺跡……20
第8図　川崎遺跡出土弥生式土器……20

# 第1章　はじめに

奥琵琶湖――東浅井郡湖北町の湖辺、湖中に所在する遺跡の調査は、昭和48年に滋賀県教育委員会によって、湖岸堤管理用道路予定地を中心とした地域で、遺跡分布調査が実施された。その結果、湖北町尾上からびわ町早崎にかけての、湖岸の砂地とそれに続く遠浅上や、湖中の浜堤状の浅瀬に、縄文時代から奈良時代にわたる遺物（土器）の散布することが確認された。

その後、本格的な発掘調査は、湖岸堤管理用道路や舟溜り工事などに伴って、昭和57年度より開始され現在も継続して行われている。これまでに湖辺で実施された発掘調査は、次のとおりである。

**昭和57年度**

（1）今西遺跡（湖北町今西地先）……湖岸堤管理用道路工事・今西工区（その1）

（2）今西遺跡（湖北町今西地先）……今西舟溜り補償工事

（3）今西遺跡（湖北町今西地先）……湖岸堤管理用道路工事・今西工区（その2）

**昭和58年度**

（4）延勝寺湖底遺跡（湖北町海老江地先）……延勝寺・海老江舟溜り工事

（5）延勝寺湖底遺跡（湖北町延勝寺地先）……湖岸堤管理用道路・延勝寺工区

（6）延勝寺湖底遺跡（湖北町今西地先）……今西航路浚渫工事

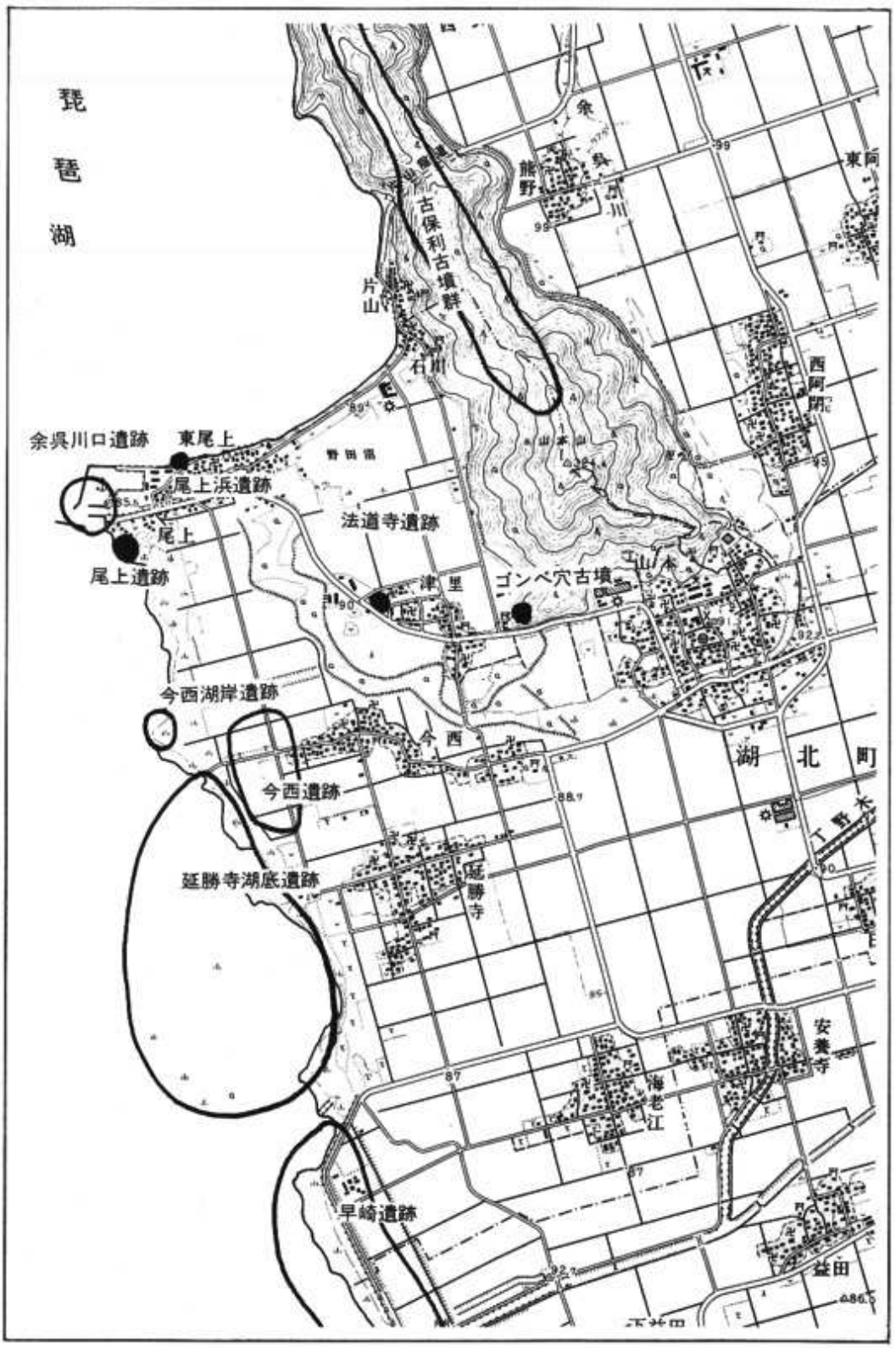
（7）尾上遺跡（湖北町尾上地先）……湖岸堤管理用道路・尾上荘

（8）尾上遺跡（湖北町尾上地先）……農村基盤総合整備事業

今回――昭和59年度に発掘調査の対象となったのは、今西と海老江の両湖岸堤管理用道路にはさまれた、延勝寺工区1,000mの区間である。

# 第2章　位置と環境

湖北町延勝寺は、国鉄北陸本線河毛（かわけ）駅の西方約3kmに位置し、湖岸より約300～400m内陸にある。今回、調査を実施した地点は、延勝寺の湖岸を中心に、北は今西、南は海老江の湖岸までの間である。中でも延勝寺の湖岸には、水没した浜堤が島状に残ったり、浅瀬が続くなど独特の景観を呈している。そして、これら地域に縄文式土器


琵琶湖
古保利古墳群
片山
石川
熊野
東阿閉
西阿閉
余呉川口遺跡
東尾上
尾上浜遺跡
尾上
尾上遺跡
法道寺遺跡
津里
ゴンベ穴古墳
山本
今西湖岸遺跡
今西
今西遺跡
湖北町
延勝寺湖底遺跡
延勝寺
安養寺
海老江
早崎遺跡
益田

第1図　周辺遺跡分布図

から歴史時代の須恵器や土師器が散布し、付近一帯に密度の高い湖底遺跡群が形成されている。また『近江輿地志略』によれば、「土俗相伝う往古此地に飯開宮とて大社あって境内大木多く森々たりしに、湖水となって湖中に沈む。林木湖底にありという」との興味深い話がある。現在、延勝寺の南端にある飯開神社は、西暦3年（992）5月の洪水で破壊され、湖中に浮ぶオコノ州から現在地に移ったといわれ、付近の湖底遺跡の成立と合せて検討すべき伝承である。

湖岸および周辺の主要な遺跡についてみてみると、尾上とその西北に位置する葛籠尾崎の間の湖中に、縄文時代早期から中世にいたる時期の土器が採集される葛籠尾湖底遺跡がある。また、余呉川河口部北側の湖岸を中心に、土師器や須恵器の散布する尾上浜遺跡、河口部の湖中には、縄文式土器や弥生式土器、石器の採集された余呉川口遺跡、余呉川の南側の湖岸から尾上の集落にかけては、平安時代の祭祀用木製品の出土する尾上遺跡が知られている。さらに南には、今西湖岸遺跡が所在し、その東から東南の陸上部には近接して今西遺跡があり、弥生時代後期から奈良時代までの長期にわたる遺物が出土しており、集落跡と考えるのが妥当である。延勝寺湖底遺跡は、湖岸から湖中の浅瀬にかけて南北約1km、東西約0.5kmにわたって、縄文式土器や弥生式土器などの散布が確認されている。また、南に近接してびわ町早崎の早崎内湖旧浜堤上に、弥生式土器、土師器、須恵器の散布する早崎遺跡がある。

一方内陸部では、顕著な縄文～古墳時代の集落跡は確認されていないものの、湖北町から高月町へかけての山本山から西野山丘陵には、古墳時代前期後半～中期前半（4世紀後半～5世紀前半）に築造された古保利古墳群や、全長約50mの前方後円墳若宮山古墳がある。また、山本山南麓には、ゴンベ穴古墳をはじめとする後期古墳も認められる。山本山の南西山麓にある津ノ里では、白鳳時代の古瓦が出土するほか塔心礎が小川の石橋に転用されているなど古代寺院跡の可能性が強い（津ノ里廃寺）。さらに南西約700mには、やはり白鳳時代の寺院跡と推定される浅井寺遺跡がある。それ以外にも、時期不群ではあるが寺の字名が各所に見られることは注意すべきであろう。

湖北町西半の湖周辺の遺跡を概観して、遺跡の全様の明確でないものもあるとはいえ、縄文時代以来古代・中世まで、きわめて遺跡の密度が高く、なおかつ重要な遺跡を含んだ地域といえよう。

## 第３章　調査の経過

本年度は前年度に引き続き、湖岸堤管理用道路建設予定地である今西樋門から海老江舟溜りの間を調査することになった。調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、滋賀県文化財保護協会技師奈良俊哉を主任調査員に得て、昭和59年６月２日より実施した。

本調査の目的は、これまでから知られている湖辺に散布する遺物と遺物包含層との関係や、遺構の有無についてである。また、路線の途中にある火葬場周辺の墓地には、中世の石塔類が寄せ集められていることから、かってこの周辺に中世墓地があったのではないかとの指摘があった。そのため、火葬場付近の路線内でこの点を確認することにした。さらに、今西から海老江の湖岸に築かれた石垣（図版８、20、21）が、いつ頃、何の目的で作られたものであるかなどを主眼とした。

調査方法は、調査範囲が南北約１kmと長いため、まず３m×３mのトレンチを概ね10m間隔に設定し、発掘することにした。そして、トレンチ内で遺構や遺物包含層が認められた場合、さらにトレンチを拡張して調査を実施することにした。トレンチは、予定地内の北端から南へ向かって、順次穿って行ったが、調査に際しては、便宜的に北から順に地形に応じて、A、B、C三地区の名称を与えた。

A地区……今西樋門から延勝寺火葬場まで。

B地区……延勝寺火葬場より南部舟着き場まで。

C地区……南部舟着き場より海老江舟留りまで。

調査地内の途中には、湖辺に灌木が生い茂り、あるいは泥湿地、小河川の河口などがあり、当初の計画どおり発掘のできない場所もあった。その場合は、状況に応じてトレンチの設定箇所を変更して行った。A～Cまで三地区の調査をほぼ完了した時点で、最後にC地区内にある石垣をめぐらせた平担地の調査を行って、昭和59年７月20日に調査を終了した。

調査実施にあたっては、湖北町教育委員会山崎清和氏、水質源開発公団湖北支所より格別の配慮を得た。記してお礼申しあげたい。

## 第４章　調査の結果

（１）　Ａ地区の調査

**第１トレンチ**　３ｍ×４ｍのトレンチで、深さ約１ｍまで堀り下げた。第３層と第５層で自然流路と思われる落ち込みを検出した。また、第５層では二次的な堆積と思われる時期不詳の土師器小片が出土した。

（第１層）　厚さ約30cm程の表土。多量の葦が混入している。

（第２層）　厚さ約20cm程の灰褐色砂礫層。0.2～0.5cm級の礫が主体を成す。腐触した木ノ葉や茎が含まれていた。

（第３層）　厚さ約20cm程の青灰色礫層。0.5～１cm級の礫が主体を成す。上面を精査中に自然流路を検出した。自然流路内の堆積は厚さ約20cm程の青灰色砂礫層である。0.5～１cm級の礫が主体を成す。土質はやや弱い粘性を持つ砂である。遺物は出土しなかった。

（第４層）　厚さ約10cm程の灰色粘質砂層。土質は弱粘性の砂である。

（第５層）　青灰色粘質砂礫層。植物のひげ根が少量含まれていた。また、層の中程で、磨滅した土師器小破片が出土した。上面を精査中に自然流路と思われる落ち込みを検出した。自然流路内の堆積は、厚さ約10cm程の青灰色砂層である。遺物は出土しなかった。第５層調査中に湧水が激しくなり、トレンチの壁が崩れて作業が危険な状態となったため、約30cm掘り下げた後、調査を中止した。

**第２トレンチ**　３ｍ×５ｍのトレンチで、深さ約１ｍまで掘り下げた。遺構や遺物は検出されなかった。

（第１層）　厚さ約30cm程の表土。多量の葦が含まれていた。

（第２層）　厚さ約30cm程の茶褐色砂層。腐触した植物の葉が多量に含まれていた。薄い粘土層が互層になっており、同一層内でさらに細分できると思われる。

（第３層）　厚さ約40cm程の淡褐色砂層。腐触した木ノ葉や茎が多量に含まれている。

（第４層）　厚さ約40cm程の青灰色砂礫層。腐触した木ノ葉が含まれていた。同一層内に薄いスクモ層が２層確認された。

（第５層）　暗灰色粘土層。土質は強粘性の粘土である。

**第3トレンチ**　3m×5mのトレンチで、深さ約2mまで掘り下げた。第3層で自然流路と思われる溝を検出した。また第3層の上面で二次的な堆積と思われる時期不詳の土師器と、土錘の小片が出土した。

（第1層）　厚さ約20cm程の表土。約10cm程掘り下げた時に、おそらく新しい時期の波打ち際の波止めかと思われる人頭大の礫が数十点敷かれたような状態で、検出された。

（第2層）　厚さ約40cm程の茶褐色粘質土。土質は弱粘性の粘土である。

（第3層）　厚さ約60cm程の青灰色砂礫層。0.2～3cm級の礫が主体となっている。上面を精査した時に、磨滅した土師器と土錘の小破片が出土した。さらに掘り下げて行く過程で、自然流路と思われる溝を検出した。溝の堆積は3層に分けられる。上層は暗青灰色砂層で、約30cmの厚さである。土質は弱粘性の砂層で、腐触した木ノ葉などが少し含まれていた。中層はスクモ層で、約10cm程の厚さである。腐触した木ノ葉や茎などからなる層で、木製品等の遺物は含まれていなかった。下層は暗灰色粘質砂層で、約30cm程の厚さである。土質は弱粘性の砂で、遺物は含まれていなかった。

（第4層）　厚さ約30cm程の黒灰色砂礫層。0.2～0.5cm級の礫が主体を成す。土質はやや粘性をもった砂である。

（第5層）　暗灰色粘土層。土質は強粘性の粘土である。遺物は含まれていなかった。

**第4トレンチ**　3m×5mのトレンチで、深さ約3mまで掘り下げた。遺構や遺物は検出されなかった。

（第1層）　厚さ約30cm程の表土。約10cm程掘り下げた時に、おそらく新しい時期の波打際の波止めかと思われる人頭大の礫が敷かれた状態で検出された。

（第2層）　厚さ約20cm程の青灰色粘質土層。土質は弱粘性の土である。

（第3層）　厚さ約30cm程の暗灰色粘質砂層。腐触した木ノ葉が少量含まれている。土質は弱粘性の砂である。

（第4層）　厚さ約50cm程の暗灰色粘土層。土質は強粘性の粘土である。この粘土層中に、タニシ等の巻貝の殻が溶けてなくなり、殻内につまった泥のみが痕跡として残った白灰色の0.7cmぐらいの泥の粒が検出された。

（第5層）　暗灰色粘土層。土質は強粘性の粘土である。遺物などは含まれていな

かった。

**第5トレンチ**　3m×3.5mのトレンチで、深さ約1.5mまで掘り下げた。遺構や遺物は検出されなかった。

（第1層）　厚さ約20cm程の水田の耕作土。

（第2層）　厚さ約20cm程の灰褐色粘質砂層。腐触した木ノ葉や植物の茎などが多量に含まれていた。土質は弱粘性の砂である。

（第3層）　厚さ約20cm程の暗灰色粘質土層。腐触した木ノ葉や植物の茎などが多量に含まれていた。土質は弱粘性の粘質土である。

（第4層）　厚さ約80cm程の灰褐色粘質土層。腐触した木ノ葉や植物の茎などが多量に含まれていた。土質は弱粘性の粘質土である。

（第5層）　暗灰色粘土層。土質は強粘性の粘土である。遺物などは含まれていなかった。

**第6トレンチ**　3m×3.5mのトレンチで、深さ約80cmまで掘り下げた。遺構や遺物は検出されなかった。第4層を掘削中に、湧水が激しくなり、トレンチの壁が崩れるため調査を中止した。

（第1層）　厚さ約20cm程の水田の耕作土。

（第2層）　厚さ約5cm程の水田の床土。

（第3層）　厚さ約20cm程の灰褐色泥土層。葦などの腐触した茎が多量に含まれている。

（第4層）　暗灰色粘土。腐触した木ノ葉が少量含まれていた。また、第4トレンチの第4層と同じタニシ等の巻貝の痕跡を検出した。

**第7トレンチ**　3m×4mのトレンチで、深さ約1mまで掘り下げた。第4層と第5層で、二次的な堆積による磨滅した時期不詳の土師器小片が数点出土したが、遺構は検出されなかった。

（第1層）　厚さ約30cm程の水田の耕作土。

（第2層）　厚さ約5cm程の水田の床土。

（第3層）　厚さ約20cm程の堆積である。腐触した木ノ葉などが少量含まれていた。

（第4層）　厚さ約10cm程の灰褐色砂礫層。腐植した木ノ葉や植物の茎などが多量に含まれていた。0.1～0.5cm級の礫が主体を成す。時期不詳の磨滅した土師器小片が、

層の中位部より出土した。

（第５層）　厚さ約20cm程の灰褐色粘質土層。土質はよくしまった、粘性の強い粘土である。時期不詳の磨滅した土師器小片が、層の上位部より出土した。また、タニシ等の巻貝の痕跡を検出した。

（第６層）　暗灰色砂礫層。0.2～３cm級の礫が主体を成す。

（２）　Ｂ地区の調査

**第１トレンチ**　３ｍ×3.5mのトレンチで、深さ約1.5mまで掘り下げた。遺構や遺物は検出されなかった。

（第１層）　厚さ約20cm程の水田の耕作土。

（第２層）　厚さ約20cm程の暗褐色砂礫層。0.2～0.5cm級の礫が主体を成している。

（第３層）　厚さ約30cm程の灰色砂層。腐触した木ノ葉が少量含まれていた。また、表面の磨滅の少ない、樹皮の残っている長さ40cm、直径10cm程の樹木の幹が出土した。しかし、腐触が進み、脆弱で取り上げられなかった。

（第４層）　厚さ約30cm程の灰褐色粘質土層。腐触した木ノ葉や植物の茎などが少量含まれていた。

（第５層）　厚さ約40cm程の青灰色砂層。

（第６層）　厚さ約40cm程の暗灰色砂層。腐触した木ノ葉などが含まれていた。

**第２トレンチ**　３ｍ×３ｍのトレンチで、深さ約1.2mまで掘り下げた。第６層上面で自然流路と思われる溝を検出した。

（第１層）　厚さ約20cm程の水田の耕作土。

（第２層）　厚さ約20cm程の暗灰色砂層。

（第３層）　厚さ約10cm程の淡灰色砂層。腐触した木ノ葉などが少量含まれる。

（第４層）　厚さ約10cm程の灰褐色砂層。腐触した木ノ葉が少し含まれていた。

（第５層）　厚さ約40cm程の灰色粘質土層。腐触した木ノ葉が少量含まれていた。土質は粘性が弱く、地下水をたくさん含むと泥土状になる。

（第６層）　厚さ約20cm程の暗灰色砂礫層。0.2～0.4cm級の礫が主体を成す。上面を精査した際、自然流路と思われる溝を検出した。溝内の堆積は３層に分けられ、上層は厚さ約10cm程の青灰色砂層。中層は、厚さ約10cm程の灰色砂層。下層は、厚さ約

10cm程の淡青灰色砂層じある。各層とも遺物は含まれていなかった。

**第3トレンチ**　3m×3.5mのトレンチで、深さ約1.2mまで掘り下げた。遺構や遺物は含まれていなかった。

（第1層）　厚さ約20cm程の水田の耕作土。

（第2層）　厚さ約15cm程の灰褐色砂層。腐触した木ノ葉が多量に含まれていた。

（第3層）　厚さ約20cm程の暗灰色粘質砂層。土質は弱粘性の砂である。

（第4層）　厚さ約40cm程の灰色粘質砂礫層。0.1～0.5cm級の礫が主体を成す。土質は弱粘性の砂で、腐触した木ノ葉などが少量含まれていた。上面を精査中に、トレンチの東南隅で、50cm程の円形をした落ち込みを検出したが、これは層中に含まれたブロック状土層であった。ブロックは、厚さ約10cm程の暗青灰色粘土層で、腐触した木ノ葉などが少量含まれていた。

（第5層）　厚さ約40cm程の暗灰色砂礫層。0.1～0.8cm級の礫が主体を成す。ここでもブロック状の土層が2カ所見られた。土層実測図の②は厚さ約10cm程の淡灰色粘質砂層。また、③は厚さ約10cm程の灰色粘質砂層である。

**第4トレンチ**　3m×3mのトレンチで、深さ約2mまで掘り下げた。第4層上面と第6層上面で、同一地点に重複して溝を検出した。遺物は含まれていなかった。

（第1層）　厚さ約15cm程の水田の耕作土。

（第2層）　厚さ約20cm程の灰色砂層。腐触した木ノ葉などが少量含まれていた。

（第3層）　厚さ20cm程の暗灰色砂層。腐触した木の葉などが含まれていた。

（第4層）　厚さ約20cm程の淡灰色粘質砂層。土質は弱粘性の砂である。上面を精査中に、自然流路と思われる溝1をトレンチの東南隅で検出した。溝の西側の肩部は判明したが、東側はトレンチ外であり、溝巾についてはわからなかった。溝の深さは最深部で約60cm程である。溝内の堆積は暗灰色粘質砂礫層からなり、0.5～2cm級の礫が主体となっている。遺物は全く検出されなかった。

（第5層）　厚さ約20cm程の青灰色粘質砂層。土質は弱粘性の砂である。

（第6層）　厚さ約10cm程の淡青灰色粘質土層。土質は強粘性の土である。第6層を精査中に、溝1とは別の、溝2を検出した。検出状況より、溝2が埋没してのち、再び同じ場所に水が流れ、溝1が形成されたものと推定される。溝2も西側の肩部だけで、溝巾は不明である。最深部で約30cm程である。溝内の堆積は暗灰色砂礫層で0.2

～0.4cm級の礫が主体を成している。遺物は溝１と同様、全く検出されなかった。

（第７層）　暗灰色粘質砂層。同一層内で土質の粘性の強弱に違いがあり、上下二層に区別できる。上層は粘性が強く、下層は弱い。

**第５トレンチ**　３ｍ×３ｍのトレンチで、深さ約1.2mまで掘り下げた。遺構や遺物などは検出されなかった。

（第１層）　厚さ約30cm程の表土。

（第２層）　厚さ約20cm程の灰褐色砂層。鉄分の沈澱が見られた。腐触した木ノ葉などが含まれていた。

（第３層）　厚さ約40cm程の青灰色砂層。

（第４層）　厚さ約30cm程の灰色粘質砂層。土質は弱粘性の砂である。湧水が激しくなり周囲の壁が崩れはじめたために調査を中止した。

**第６トレンチ**　３ｍ×３ｍのトレンチで、深さ約1.3mまで掘り下げた。第２層と第５層を精査中に２つの落ち込みを検出した。特に第５層の落ち込みからは弥生式土器や土師器の小片が数点出土したために東隣りに第７トレンチを設定した。

（第１層）　厚さ約20cm程の水田の耕作土。

（第２層）　厚さ約20cm程の灰褐色砂層。腐触した木ノ葉や植物の茎などが含まれていた。上面を精査中に落ち込みを検出した。落ち込み中は黒褐色腐植土で厚さ約20cm程である。腐触した木ノ葉や植物の茎などばかりで、木製品などの遺物は含まれていなかった。

（第３層）　厚さ約40cm程の暗灰色砂層。腐触した木ノ葉などが少量含まれていた。

（第４層）　厚さ約30cm程の暗青灰色砂層。上面を精査中に溝を検出した。溝は厚さ約10cm程の暗褐色粘質土層。層中より、弥生式土器と土師器の小片が数点出土した。また、腐触した木ノ葉などが少量含まれていた。

**第７トレンチ**　３ｍ×３ｍのトレンチで、深さ約1.2mまで掘り下げた。第６トレンチの第５層で検出した溝の広がりを把握するために設定したトレンチである。

（第１層）　厚さ約20cm程の水田の耕作土。

（第２層）　厚さ約20cm程の灰褐色砂層。腐触した木ノ葉や植物の茎などが含まれていた。

（第３層）　厚さ約40cm程の暗灰色砂層。腐触した木ノ葉や植物の茎などが含まれ

ていた。

（第４層）　厚さ約40cm程の暗青灰色砂層。第４層上面より溝２が掘り込まれている。溝２は西側のトレンチの続きであるが、トレンチの西側の⅔を占めるほど大きなものであり、東肩部しか検出できなかった。溝内は、厚さ約40cm程の暗褐色粘質土が一層だけ堆積していた。弥生式土器や土師器小片が東側肩部付近より数点出土した。溝２は肩部の掘り込みが明瞭とはいえず、おそらく人工的に掘り込んだものではなく自然流路であったと思われる。出土した土器もそれに伴い二次的に流入したものと考えられる。

**第８トレンチ**　３ｍ×３ｍのトレンチで、深さ約２ｍまで掘り下げた。第３層と第５層で落ち込みを検出した。

（第１層）　厚さ約15cm程の表土。

（第２層）　厚さ約20cm程の灰褐色砂層。腐触した木ノ葉や植物の茎などが多量に含まれていた。

（第３層）　厚さ約20cm程の灰色粘質土層。腐触した木ノ葉が含まれていた。上面を精査中に落ち込みを検出した。この落ち込み内の土層は暗灰色砂礫層で、約20cm程の堆積を示している。0.2～0.8cm級の礫が主体を成している。

（第４層）　厚さ約40cm程の暗灰色粘質砂層。

（第５層）　暗灰色粘土層。上面を精査中トレンチの東側半分を占める落ち込みを検出した。この落ち込みは約１ｍ程の深さで、堆積は灰色砂礫層の一層だけである。遺物などは含まれていなかった。

**第９トレンチ**　２ｍ×３ｍのトレンチで、深さ約2.4ｍまで掘り下げた。遺構や遺物は検出されなかった。湧水が多く、下層は機械で掘削した。

（第１層）　厚さ約40cm程の水田の耕作土。

（第２層）　厚さ約50cm程の茶褐色粘質土層。

（第３層）　厚さ約20cm程の茶褐色砂層。

（第４層）　厚さ約10cm程の灰褐色粘土層。表面の磨滅の少ない、樹皮の残った長さ20cm、直径が５cm程の樹皮片を検出した。

（第５層）　厚さ約30cm程の灰褐色砂層。腐触した木ノ葉が少し含まれていた。

（第６層）　厚さ約30cm程の淡青灰色粘土層。

（第７層）　厚さ約20cm程の淡青灰色砂層。少量の腐触した葉などが含まれていた。

（第８層）　暗灰色粘土層。土質は強粘性の粘土である。

（３）　Ｃ地区の調査

**第１トレンチ**　４ｍ×４ｍのトレンチで、深さ約1.2ｍまで掘り下げた。第３層と第４層で遺物がまとまって出土し、明確な包含層であることを確認したため、トレンチを東側に３ｍ×８ｍの大きさで拡張した。

（第１層）　厚さ約40cm程の表土である。約５cm程掘り下げた時、おそらく新しい時期の波打ち際の波止めかと思われる人頭大の礫が数点敷かれたような状態で検出された（図版10）。

（第２層）　厚さ約30cm程の明褐色粘土層。土質はやや粘性の強い粘土である。

（第３層）　厚さ約40cm程の暗黒褐色粘土層。上面で罹股式の鉄鏃が出土した。また、磨滅した土師器小片が２、３含まれていたが時期不詳である。

（第４層）　淡褐色粘土層。土質は強粘性の粘土である。上面を精査したところ、弥生式土器の破片がまとまって出土した。また、落ち込みを検出したが、堆積状況からみて、自然流路と考えた。堆積は上層が暗褐色砂礫層で、厚さ約10cm程である。下層は淡褐色粘質砂層で、厚さ約20cm程である。いづれも、遺物は含まれていなかった。

**第２トレンチ**　４ｍ×５ｍのトレンチで、深さ約1.2cmまで掘り下げた。第３層で二次的な堆積によるものと思われる遺物が出土した。

（第１層）　厚さ約30cm程の表土。

（第２層）　厚さ約30cm程の茶褐色砂礫層。0.1～0.5cm級の礫が主体を成す。

（第３層）　厚さ約20cm程の暗褐色粘質土層。土師器や須恵器の甕の破片、陶磁器の破片が出土した。内陸部方面から押し流されるなどした二次的堆積である。

（第４層）　厚さ約20cm程の暗赤褐色礫層。５～15cm級の礫が主体を成す。

（第５層）　灰色粘土層。遺物は含まれていなかった。

**第３トレンチ**　３ｍ×４ｍのトレンチで、深さ約1.2ｍまで掘り下げた。遺構や遺物などは検出されなかった。

（第１層）　厚さ約10cm程の表土である。

（第２層）　厚さ約30cm程の明褐色粘質土層。土質は弱粘性である。

（第３層）　厚さ約30cm程の淡茶褐色粘質砂質。土質は弱粘性である。

（第４層）　厚さ約10cm程の淡青灰色粘質土層。腐触した木ノ葉が少量含まれていた。

（第５層）　厚さ約20cm程の赤褐色砂礫層。５～10cm級の礫が主体を成す。

（第６層）　厚さ約20cm程の青灰色粘土層。腐触した木ノ葉が少量含まれていた。

（第７層）　暗灰色粘土層。土質は強粘性の粘土である。

**第４トレンチ**　２ｍ×５ｍのトレンチで、深さ約1.2mまで掘り下げた。第４層上面を精査中に柱状の木製品が出土したために、建物跡の柱ではないかと考え、他の柱あるいは柱跡を検出すべくトレンチを拡張したが、建物跡にはならなかった。

（第１層）　厚さ約40cm程の表土。

（第２層）　厚さ約20cm程の暗褐色砂礫層。１cm級の礫が主体を成している。

（第３層）　厚さ約50cm程の暗青灰色粘土層。土質は強粘性の粘土である。　（第４層）　暗灰色砂層。上面精査中に柱状木製品が出土した。柱状木製品は立った状態であった。そのため他に関連する柱や柱跡などを探すためにＬ字型にトレンチを拡張したが遺構や遺物は検出されなかった。

**第５トレンチ**　２ｍ×４ｍのトレンチで、深さ約１cmまで掘り下げた。海老江樋門の北側にあたり、樋門へ流れる水路の氾濫による湿地帯となっている場所である。

（第１層）　厚さ約20cm程の表土。葦などの根が多量に含まれている。

（第２層）　厚さ約30cm程の茶褐色砂礫層。鉄分の沈澱が見られる。0.2～0.5cm級の礫が主体を成す。

（第３層）　厚さ約20cm程の暗灰色粘土層。弱粘性の粘土である。

（第４層）　暗灰色粘土層。土質は強粘性の粘土である。

（４）　石垣の調査

Ｃ地区の南部舟留り南側に、石垣で南、北、西の三方を囲んだ平坦地がある。このうち西側は、琵琶湖に面しており、北側は石垣に沿って水路が流れている。平坦地は杉林として使用されていたようである。

石垣の長さは、南面が1.5m、西面が20m、北面が６ｍで、東側には積まれていない。高さは西面と北面が地表より約1.8m程で、角ばった石を５段に積んでいる。南側

は高さ約１m程で、東に向って徐々に下がっている。

石垣の基底部は地表から約10cm程で検出したが、根太などは無かった。また、基底部検出の際に、表土である黄褐色土に、弥生式土器、須恵器などの土器が数点出土した。

石積みに使用されている石の大きさは、人頭大のものが多いが、北西の隅の最上部にある石は、タテ70cm×ヨコ150cm×高さ60cm程の大きな石を用いている。こうした比較的大きな石材は、石垣の上部に見られるが、特に石の形状や大きさに規格性は認められない。ただし、石垣の表面は平端にそろえられている。また、平坦地の盛り土と、石垣の裏込め石を観察するために、２本のトレンチを平坦地上に設定し掘削した。

**第１トレンチ**　このトレンチは、盛り土の状況を観察するために設定した。大きさは、３m×２mのトレンチで、深さ約１mまで掘り下げた。

（第１層）　厚さ約20cm程の表土である。

（第２層）　厚さ約10～30cm程の褐色砂層。よくつきかためている。

（第３層）　厚さ約10～30cm程の褐色粘土層。よくつきかためている。腐触した木ノ葉や植物の茎、またシジミと思われる二枚貝の貝殻が少量含まれていた。

（第４層）　暗赤褐色砂礫層。深さ約80cmまで掘り下げた。３～５cm級の礫が主体を成す。

**第２トレンチ**　このトレンチは、石垣の裏込めの状況を観察するために設定した。

（第１層）　厚さ約30cm程の表土。５～８cm程の丸い石が栗石として使われており、表土と混ざっている。また、人頭大よりやや小さい、角ばった石を裏込めとして使用している状況が検出された。

（第２層）　厚さ約30cm程の褐色砂層。よくつきかためられている。

（第３層）　厚さ約30cm程の暗灰色粘質土層。裏込めに用いた石の最下部を検出した。裏込め石の最下部は粘質土層の中ほどに段を作って、その上に乗っている状態で検出した。

（第４層）　暗茶褐色砂礫層。５～15cm級の礫が主体を成す。

# 第5章　出土遺物

## （1）　土　器

### 1　C地区

**第1トレンチ**　弥生時代前期（第Ⅰ様式）の、甕や壺の破片が出土している。各個体とも磨滅しており、器面の調整は観察できなかった。

甕（1）は、短い口縁部がわずかに外反し、頸部に5条のヘラ描き沈線を施す。胎土は砂粒を多く含む。色調は暗赤褐色である。

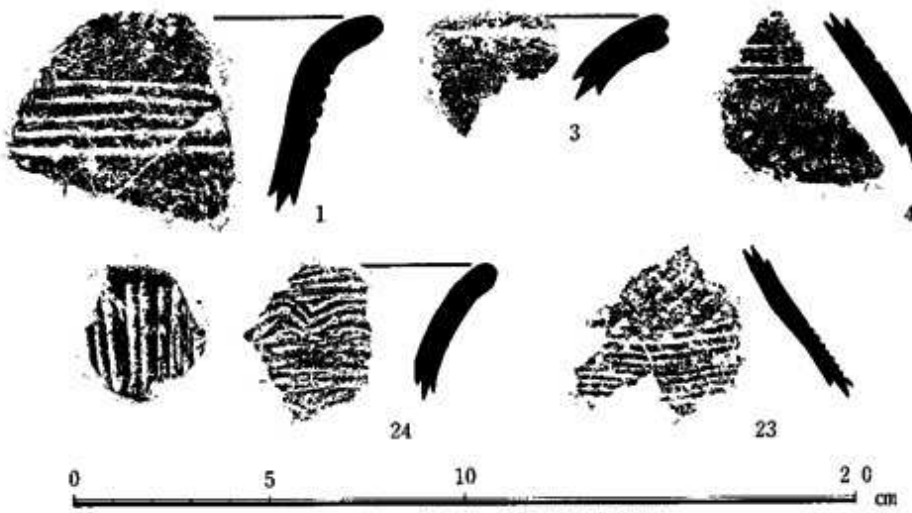
壺（3）は、口縁端部に一条のヘラ描き沈線を周らしている。胎土は砂粒を多く含む。色調は淡黄灰色である。

（2）は頸部と思われる。胎土は砂粒を多く含む。色調は淡黄灰色である。

（4）は肩部で、三条のヘラ描き沈線を施す。胎土は砂粒を多く含む。色調は淡黄灰色である。

（5、6）は底部で、胎土は砂粒を多く含む。色調は淡黄灰色である。

**第2トレンチ**　須恵器（7、8、10）、土師器（9、11）陶器（11、12、15、16）、磁器（13、14、17）が出土している。




第2図　C地区出土弥生式土器実側図

〔須恵器〕

杯蓋（7、8）天井部と思われる。共に外面にはヘラケズリが残る。胎土は0.2cm程の小石が2、3見られた。色調は淡青灰色である。

杯（10）は、底部と思われる。器面が磨滅し、調整は観察できなかった。胎土は0.1cm程の小石が2、3見られた。色調は淡青灰色である。

〔土師器〕

甕（9、11）は、肩部である。器面は磨滅し、調整は観察できなかった。胎土は0.1cm程の小石が多量に含まれている。色調は暗褐色である。

〔陶　器〕

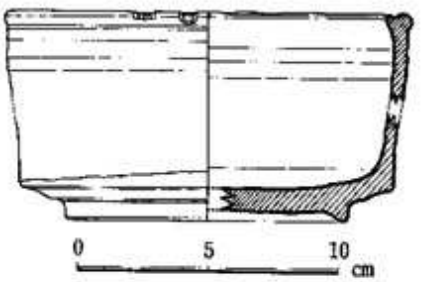
壺（16）は、底部である。

火入れ（12、17）は、口縁部（12）と底部（17）は、胴部が欠損しているが、同じ個体である。焼きすぎのため釉がとんでいる。

すり鉢（12）は、信楽のもので、室町時代15世紀頃のものか。

〔磁　器〕

碗（14、15）と、皿（18）は、いずれも18世紀頃の染付と考えられる。



第3図　陶製火入れ実側図

2．石　垣

弥生式土器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器が出土している。

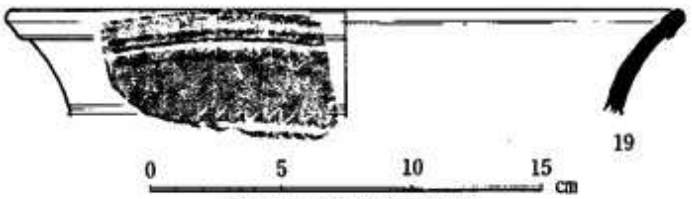
〔弥生式土器〕

甕（24）は、弥生時代中期のものである。内面には太に櫛描き平行線と波状文を施している。外面には粗いハケ目を施している。胎土は0.1cm程の小石が2、3見られる。色調は淡褐色である。

甕（20、23）は、弥生時代後期のものである。（23）は、肩部外面に櫛描き平行線と刺突烈点文を施す。胎土は砂粒を少し含む。色調は淡褐色である。（20）は、器面が剝離し調整は観察できなかった。胎土は0.2cm程の小石が多く見られた。色調は淡茶褐色である。

〔須恵器〕

甕（19、21、27）は、古墳時代後期のものである。（19）は、頸部に波状文を施す（第4図）。胎土は1㎜程の小石が少し見られた。色調は暗灰色である。（21、27）は、外面にタタキ目、内面には青海波文が施されている。



第4図　須恵器実側図

壺（26、28）は、共に器面が磨滅しているが、外面にカキ目を施。胎土は、（26）には1㎝程の小石が2つ見られた。（28）は砂粒が多く含まれる。色調は淡青灰色である。

杯（22）は、底部である。外面は不調整である。胎土は砂粒を少し含む。色調は淡灰色である。

〔瓦質土器〕

火舎（25）は、器面が磨滅し、炭素は一部剝離している。ヘラミガキなど調整は観察できなかった。

〔陶　器〕

土瓶（32）と、甕（33）は、共に18世紀頃と推定される。

〔磁　器〕

皿（29）と碗（30、31）は、共に18世紀頃の染付と考えられる。

（2）　木製品（図版15－下）

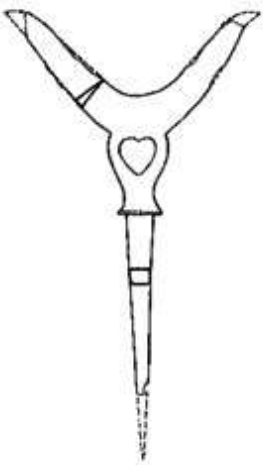
C地区第4トレンチ第4層上面から出土した柱根は、残存高25㎝、直径20㎝で、底部には整形のために手斧のようなもので削った跡がある。出土時は、かなり保存状態がよく取上げも容易に思えたが、実は見かけ以上に脆弱で、取上げ時に分解してしまった。かなり植物の根が柱痕にくいこんでおり、これも分解を早めた要因の一つと言えよう。針葉樹。

（3）　鉄製品（図版15－上）

C地区第1トレンチ第3層より出土した鉄鏃は、雁股とよばれる形式のものである。鏃の現存長は9.7㎝、最大幅5.6㎝を測る。逆刺先端は欠損するが、旧状は外反するよ

うで、刃は内側に作られている。逆刺は、薄く扁平な形である。股部には、かたばみ形の透しがあり、茎は先端が先細りで、先端より⅔のところに篦被とよばれる稜がある。

雁股式の鏃は、早く奈良時代よりあり、『東大寺献物語』にも「加理麻多」の名がみられる。また、中世にも長く用いられていた。本例に類似した例は、『貞丈雑記』にみられる鏑矢にあるが、ここでは共伴遺物がないため年代を決めがたい。出土状況より考えて、奈良時代以降中世の広い年代幅でとらえたい。

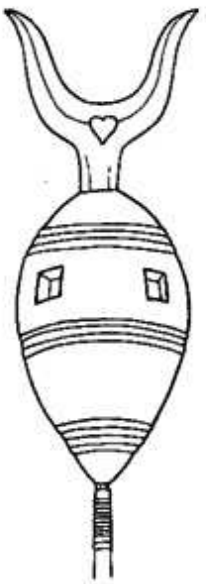


第5図　C地出土鉄鏃

## 第6章　結　　語

### （1）　調査のまとめ

**遺物包含層の有無**　今回の調査で、A、B、C三地区中、明確な遺物包含層が認められたのは、C地区の第1トレンチ第4層だけであった。他の地区からも小片ながら遺物は出土しているが、いずれもローリングを受けて磨滅しており、すべて二次的な堆積を示すものばかりであった。ちなみに、C地区第1トレンチは、昭和48年の分布調査で湖岸の畑地から弥生式土器や土錘が採集されており、発掘調査開始当初より遺構や遺物包含層の検出に期待がかけられていた地点である。



第6図　雁股鏃(『貞丈雑記』より)

C地区第1トレンチの第4層から出土した弥生式土器は、外面に数条のヘラ描沈線を施した甕を伴う弥生時代前期（第Ⅰ様式）のもので、形態、手法などよりみて新段階に比定される。出土状況は、第4層上面で、トレンチ内の東側に散在して出土した。なお、この層中からは、第Ⅰ様式以外の時期の遺物は出土していない。遺物の出土量と地形から推察して、遺物包含層の中心はおそらく東側の内陸部の微高地上に所在するものと考えられ、本トレンチの遺物包含層はその西限といえる。

**B地区・中世墓地の問題**　B地区では、火葬場の周辺で中世墓地の有無を検討したが、墓地の存在を裏づけるような遺構や構物はまったく検出されなかった。火葬場に近接してトレンチは設けなかったが、周囲のトレンチの状況から考えて、現在の墓地に残る中世（室町時代）の石塔類は、おそらく江戸時代以降墓地の形式に伴って付近から寄せ集めてきたものであろう。もし仮に、中世に墓地が営まれていたとしても、現在の墓地と重複した、きわめて範囲の限定されたものであっただろう。

**延勝寺湖岸の石垣**　A地区より続く湖岸の石垣は、C地区の調査地点が南限である。C地区で調査した石垣については、その形状をよく観察すると、北面と西面は比較的大きな石を用いて、石の面を整えて築いているが、南面は雑に石を積上げただけで特に整えられていない。石垣がよく整備されている北面は水路、西面は琵琶湖に面している。

湖岸に築かれた石垣は、各々同じような規模と構造で、湖側を意識している。これは、瀬田川の南郷洗堰改修（明治38年）以前、増水があると湖水面が上昇し、しばしば内陸部まで侵水の被害をうけていた。そのため、特にこの地域では、湖岸に石垣を築いて侵水を防いだり、あるいは舟道を確保したのである。

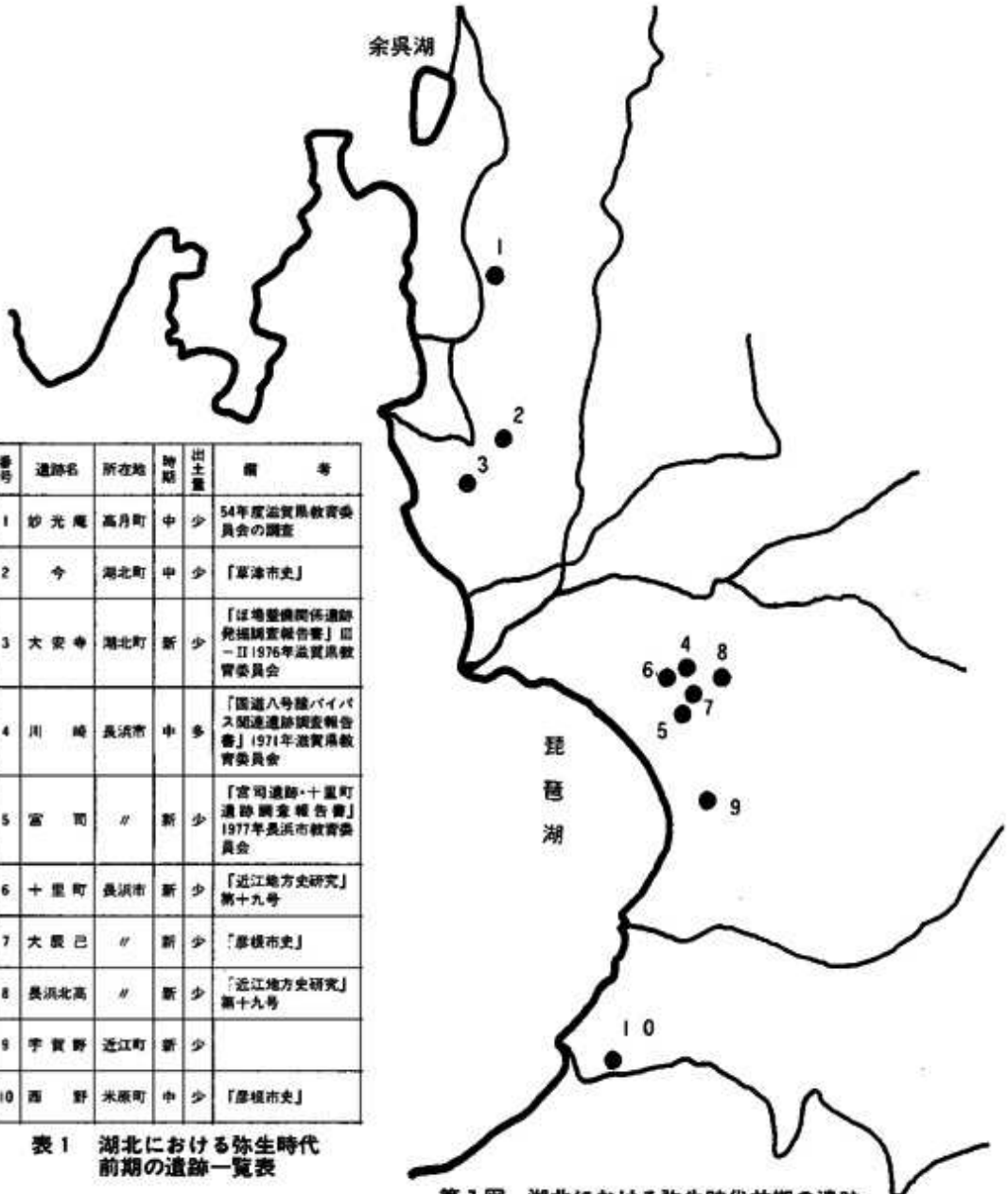
C地区調査地の北面石垣に沿って東西に流れる水路は、湖から延勝寺の村の西端まで続き、以前は村の中に舟着き場が設けられていた。この水との闘いに石垣が築かれた時期は比較的新しく、古老の談によれば明治の中頃に、対岸の葛籠尾崎より石を舟で運んで築いたといわれている。

（2）　湖北における弥生時代前期の遺跡分布

**遺跡の分布**　県下の弥生時代前期の遺跡は、これまで湖南を中心に分布が知られていた。ことに近年の開発に伴う発掘調査が増えるにつれ、遺跡および資料の増加は著しい。このような中にあって、湖北では長浜平野に所在する川崎遺跡や大辰巳遺跡が著名であったが、それ以外の前期の遺跡はほとんど知られていなかった。ところが最近になって、今回の調査で発見されたように、少量ではあるば湖北各地で第Ⅰ様式の土器が確認されるようになってきた。現在までに判明した遺跡は別表に示すとおりである。

**主な前期弥生式土器**

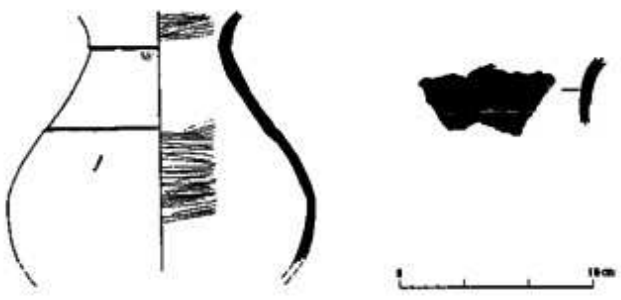
（1）　長浜市川崎遺跡




第7図　湖北における弥生時代前期の遺跡

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時期 | 出土量 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 妙光庵 | 高月町 | 中 | 少 | 54年度滋賀県教育委員会の調査 |
| 2 | 今 | 湖北町 | 中 | 少 | 「草津市史」 |
| 3 | 大安寺 | 湖北町 | 新 | 少 | 「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」III－II 1976年滋賀県教育委員会 |
| 4 | 川崎 | 長浜市 | 中 | 多 | 「国道八号線バイパス関連遺跡調査報告書」1971年滋賀県教育委員会 |
| 5 | 宮司 | 〃 | 新 | 少 | 「宮司遺跡・十里町遺跡調査報告書」1977年長浜市教育委員会 |
| 6 | 十里町 | 長浜市 | 新 | 少 | 「近江地方史研究」第十九号 |
| 7 | 大戸呂 | 〃 | 新 | 少 | 「彦根市史」 |
| 8 | 長浜北高 | 〃 | 新 | 少 | 「近江地方史研究」第十九号 |
| 9 | 宇賀野 | 近江町 | 新 | 少 | |
| 10 | 西野 | 米原町 | 中 | 少 | 「彦根市史」 |

表1　湖北における弥生時代前期の遺跡一覧表



第8図　川崎遺跡出土弥生式土器

川崎遺跡では第一次の調査で多数の弥生時代前期第Ⅰ様式の中段階に比定される土器が出土された。又、この時に中段階の土器と供伴して東海系の五貫森式土器や樫王式などの縄文晩期の土器も出土している。川崎遺跡はその後、長浜市教育委員会によって数次の調査が行われた。その結果宮成良佐によると調査が行われた。その結果宮成良佐によると第8図の1、2の土器を前期第Ⅰ様式古段階に比定し、遺跡自体の時期も古段階にまで下げた。

（2） 高月町妙光庵遺跡

妙光庵遺跡からは少条のヘラ描き沈線を持つ甕などが遺構より出土している。この遺構は南北方向に2.5m×東西方向に1.5mの楕円形の土拡である。出土土器から前期第Ⅰ様式中段階に比定される。また、湖北では、唯一遺構に伴う出土であり、貴重な資料となっている。

（3） 米原町西野遺跡

入江内湖の扞拓事業によって出現した遺跡である。地元の彦崎文五郎氏によって、縄文時代以降の遺物が多数確認され、『彦根市史』に報告された。ここでは、少条のヘラ描き沈線をもつ土器や多条のヘラ描き沈線をもつ土器など弥生時代前期第Ⅰ様式の中段階から新段階にかけての遺物が表面採集されている。

（4） 長浜市十里町遺跡

十里町遺跡では第一次調査で新段階のヘラ描き沈線をもつ壺が出土している。第二次調査では三条のヘラ描き沈線をもつ土器や削り出し突帯をもつ土器片の出土が報じられている。

（5） 長浜市宮司遺跡

宮司遺跡では新段階の多条のヘラ描き沈線をもつ土器が出土している。又、ここでは、東海系の縄文晩期の土器も共伴して出土している。

（6） 湖北町大安寺遺跡

大安寺遺跡では、ほ場整備による事前発掘調査の際に、新段階と思われる多条のヘラ描き沈線をもつ甕が表面採集されている。

（7） 長浜市長浜北高遺跡

長浜北高遺跡では新段階と思われる多条のヘラ描き沈線をもつ土器が、少量ではあるが出土している。

**まとめ**　上述した遺跡の時間的な関係は、まず古段階の土器の出土が報告されている川崎遺跡が弥生時代の初現として位置づけられよう。古段階とした土器については、口縁部の破片のみであり、この土器の全体像については必ずしも明確ではない。また、出土土器が2片しかないことなどから川崎遺跡を古段階の時期まで下げる事については疑問が残る。しかし、供伴して出土した縄文晩期の土器や、中段階の特徴をもつ土器の中にも古い要素をもつ削り出し突帯の土器が存在することなどから、やはり湖北では弥生時代前期の遺跡としては最初の遺跡であろう。川崎遺跡の次に位置づけられるのは妙光庵遺跡である。妙光庵遺跡では削り出し突帯をもつ土器の存在も確認されている。そして同じ様な時期に西野遺跡も出現したのであろう。

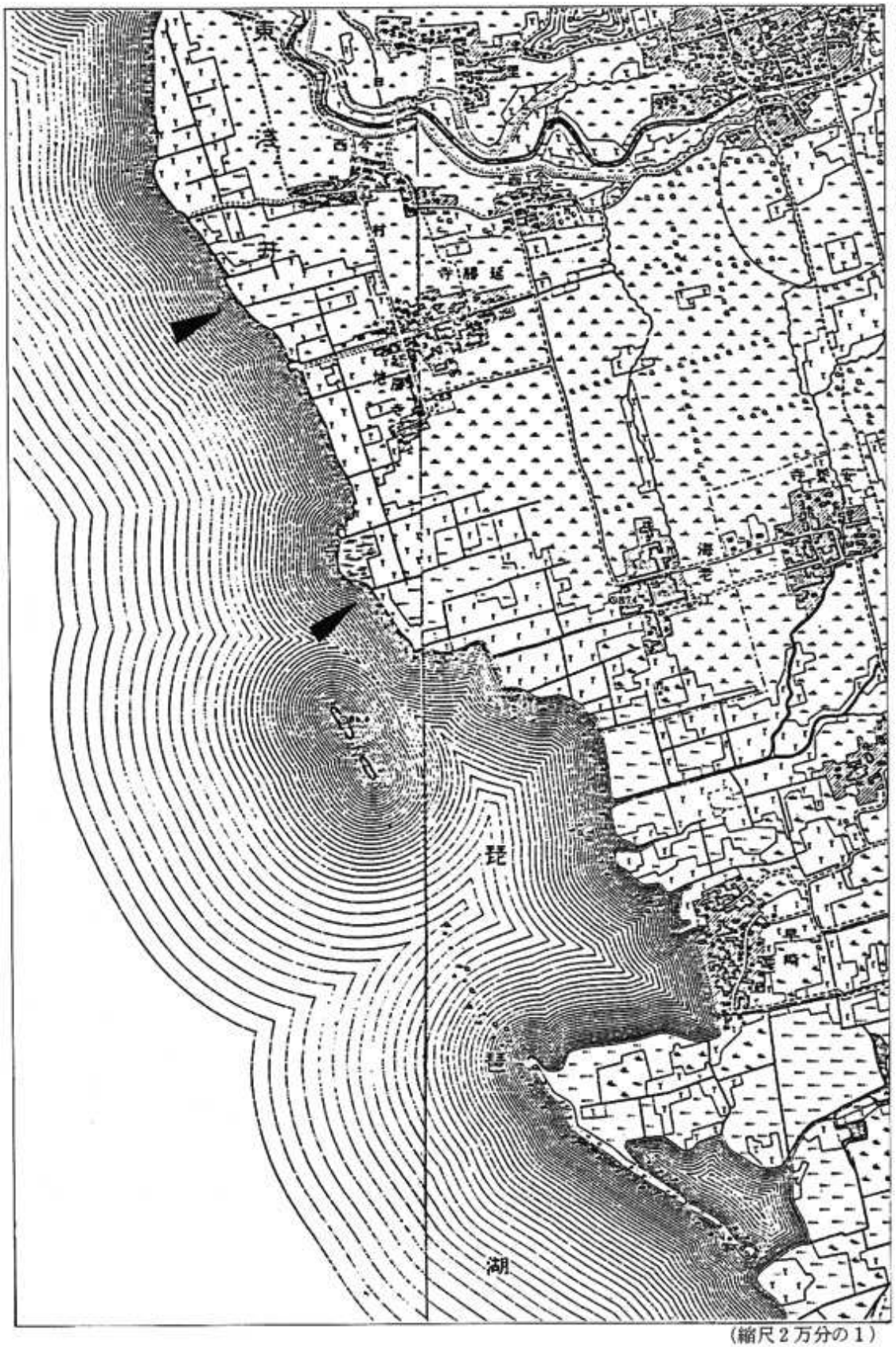
新段階になると長浜平野の後背湿地を中心にして遺跡が広がる。なかでも弥生時代中期に最大規模になる大辰巳遺跡などは前期新段階で早く遺物がまとまって出土している。また、川崎遺跡などは引き続いて遺物の出土が見られ、その周辺部である宮司、十里川遺跡などが出土してくる。長浜平野以外にも新段階になると遺跡が多少増加してくる。

以上のように遺跡を概観すると、弥生時代前期第Ⅰ様式の中心は、長浜平野の後背湿地に生活していた人々に求めることができよう。当時の地形的な考察は、これまでになされた事がなく十分な判断をすることができないが、湖北の湖岸には内湖が多く、浜堤状の地形に生活基盤を求めて居住するには不都合が多かったと考えられ、長浜平野以外の遺跡は、妙光庵遺跡を除けば、いづれも少規模なものばかりである。そして、中期以降に何らかの生活改善策が考えられたか、地形の変動によって空間が広がったかして、長浜平野以外の地域にも大規模な遺跡が出現してくると考えられる。

なお、長浜平野にある弥生時代前期の遺跡のなかで、川崎、宮司、十里町遺跡では、前期第Ⅰ様式の土器と供伴して、東海系の樫王式、五貫森式といった縄文晩期の土器が出土している。このことは弥生時代前期においても、湖北における土器様相は東海地方と交錯した状況にあったと考えられる。

# 図　　版

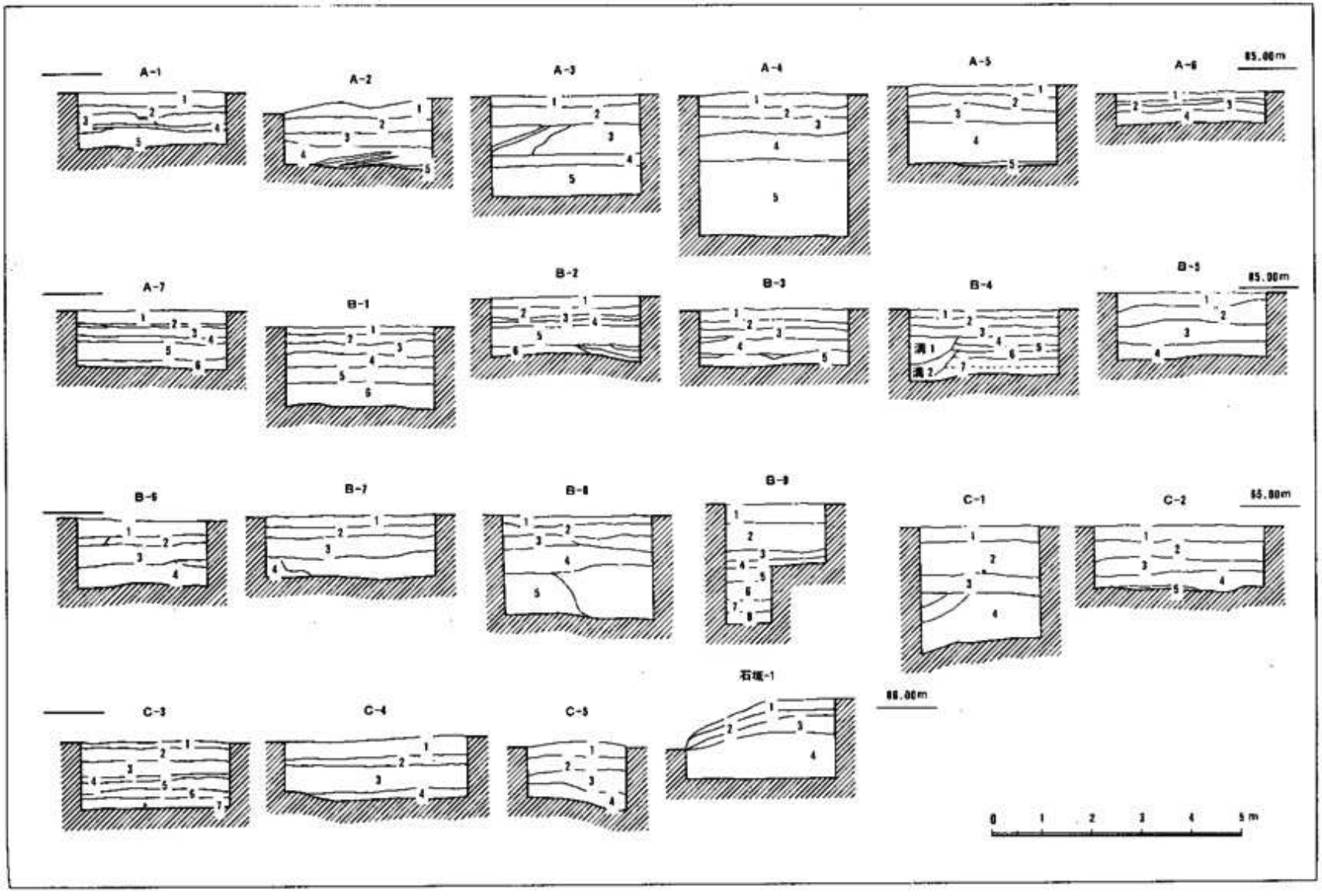
# 図版一　遺跡位置図




（縮尺２万分の１）

図版11　トレンチ配置図

# 図版三　土層断面図


A-1
A-2
A-3
A-4
A-5
A-6
85.00m
A-7
B-1
B-2
B-3
B-4
B-5
85.00m
B-6
B-7
B-8
B-9
C-1
C-2
85.00m
C-3
C-4
C-5
石垣-1
86.00m
0 1 2 3 4 5m

# 図版四　遺跡周辺全景

(昭和59年11月撮影)

# 図版五　延勝寺遺跡全景

（昭和58年10月撮影）

（昭和59年11月撮影）

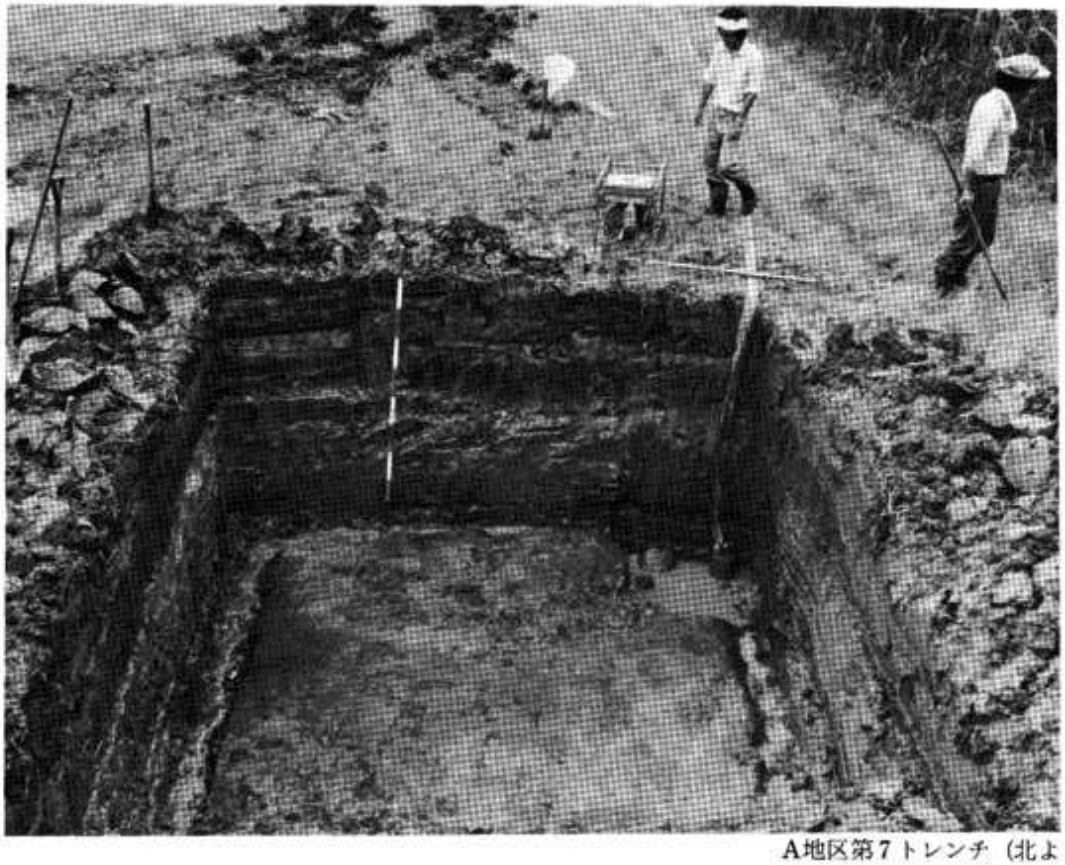
# 図版六　A地区

A地区近景

A地区第3トレンチ（北より）

# 図版七　A地区

A地区第5トレンチ（北より）



A地区第7トレンチ（北より）

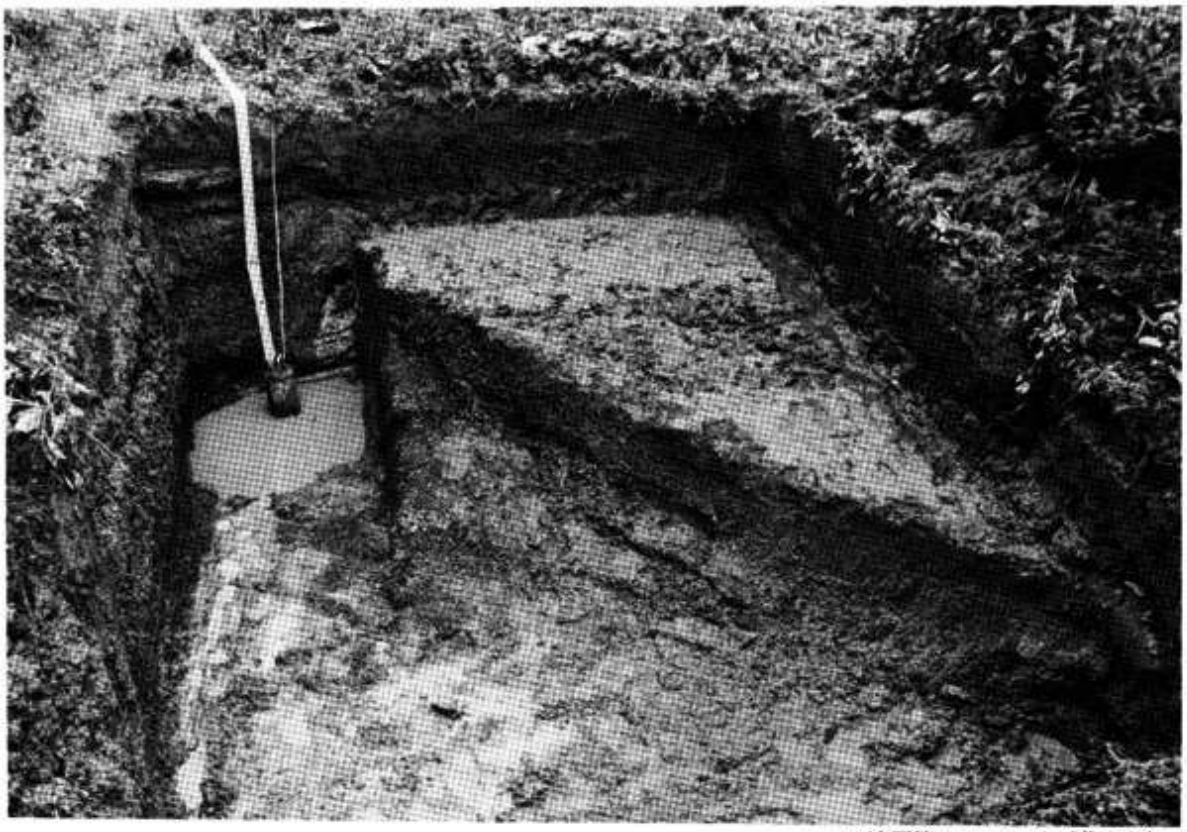
# 図版八　B地区

墓地

石垣西面

# 図版九　B地区

調査風景

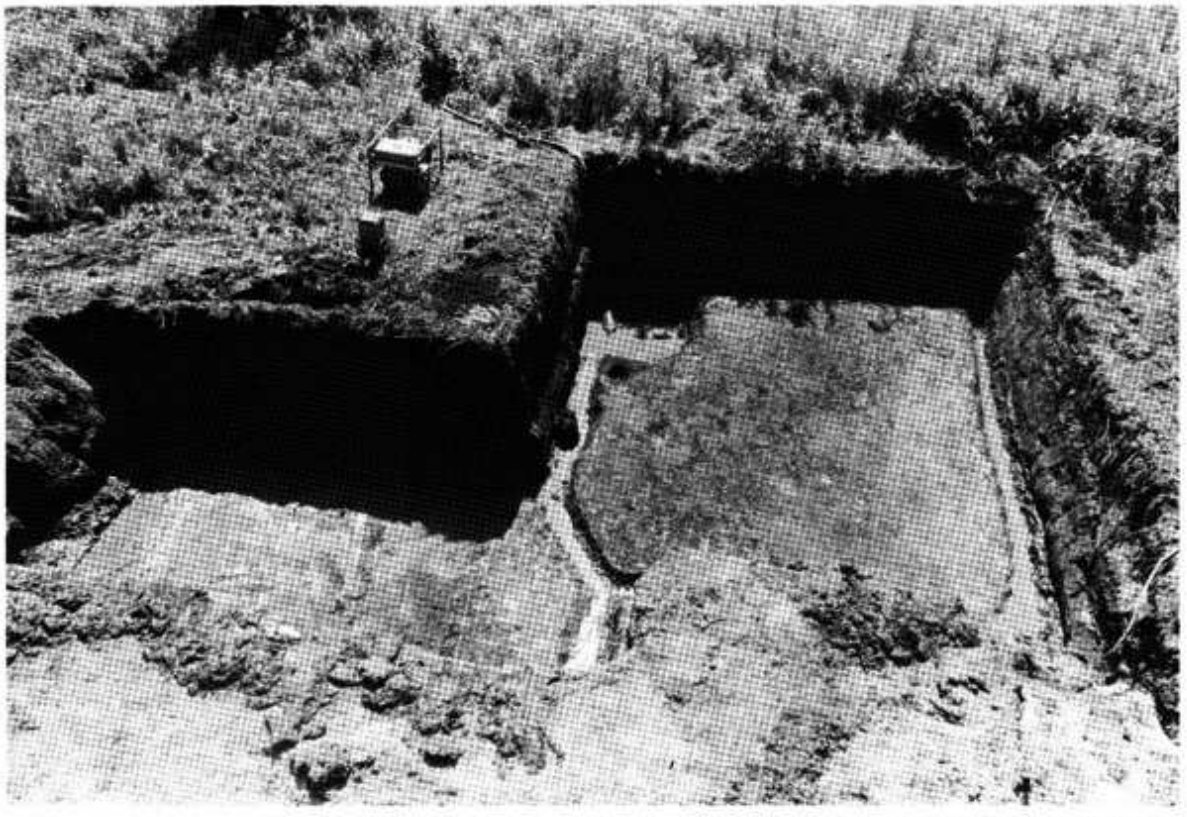


B地区第6トレンチ（北より）

C地区第1トレンチ礫群調査状況

C地区第1トレンチ（南より）

C地区第5トレンチ（南より）



C地区第6トレンチ（南より）

# 図版十二　C地区遠景

（南西より）

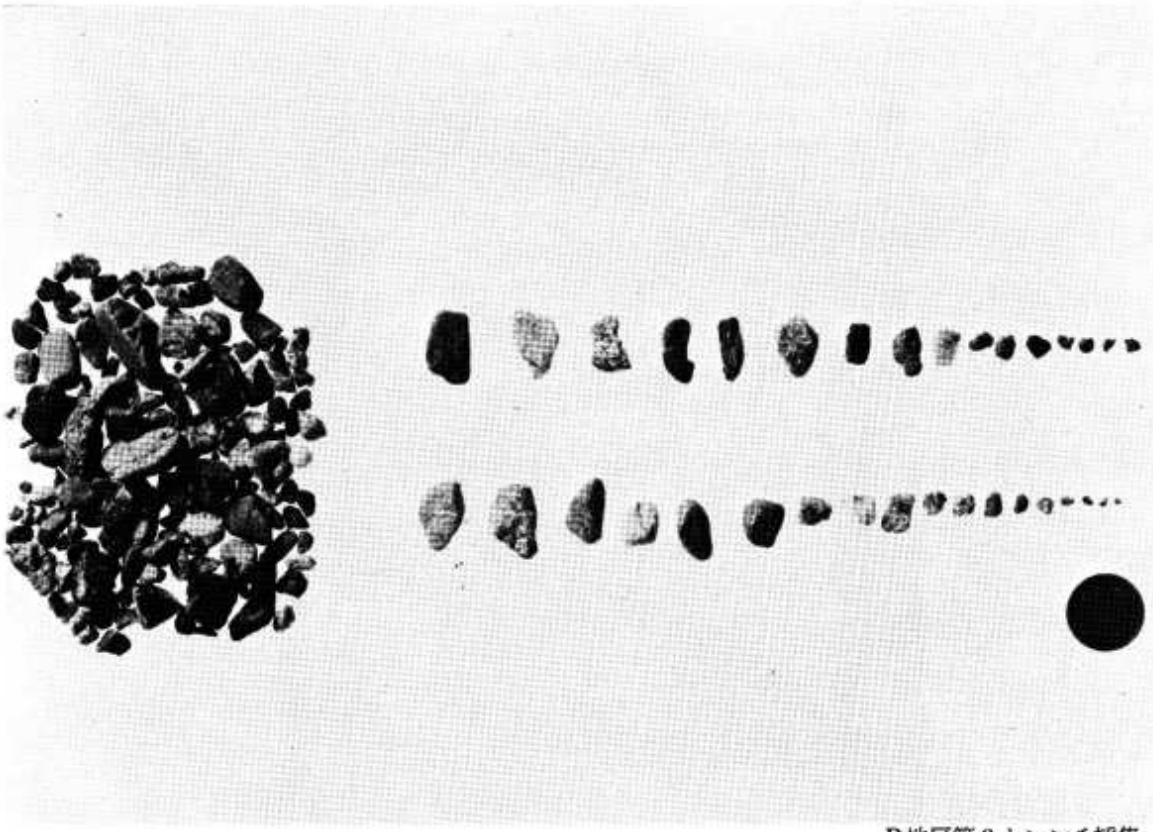
（北西より）

# 図版十三　C地区石垣トレンチ

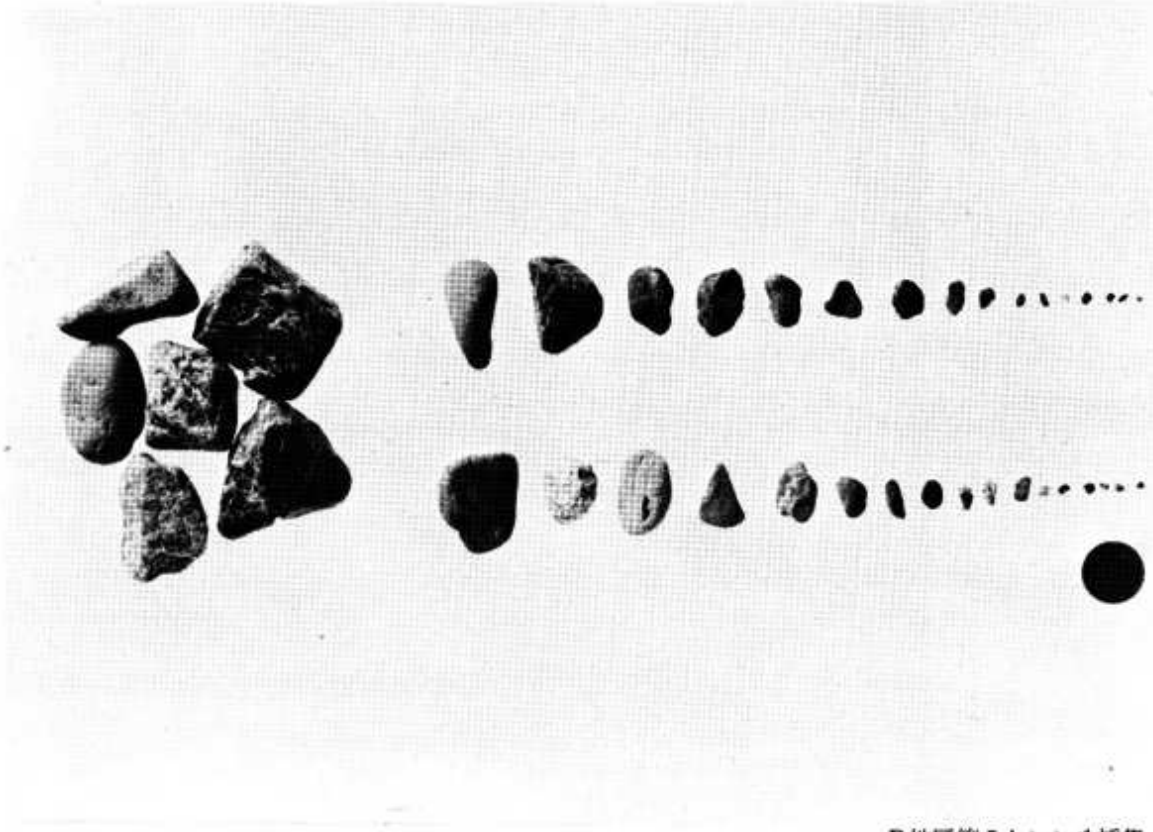
C地区南面石垣裏込の状況

C地区西面石垣裏込の状況

# 図版十四　B地区採集礫

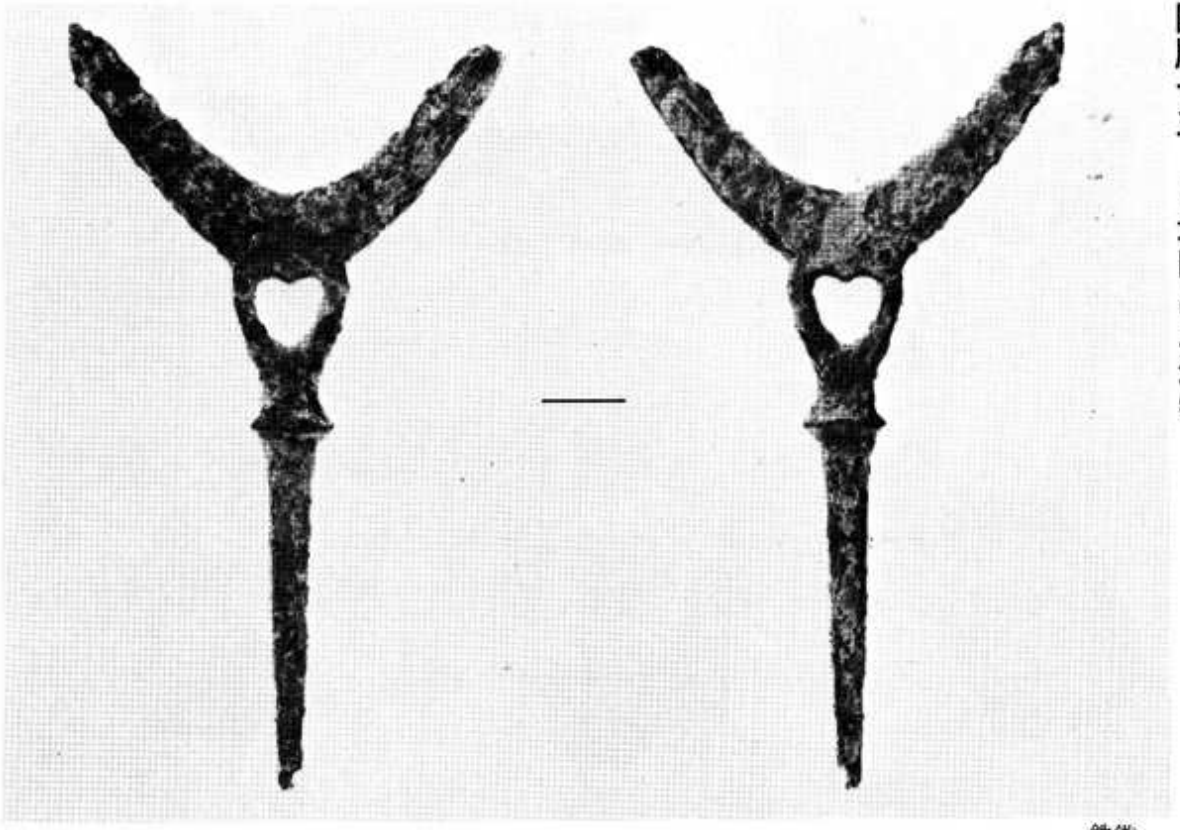


B地区第2トレンチ採集

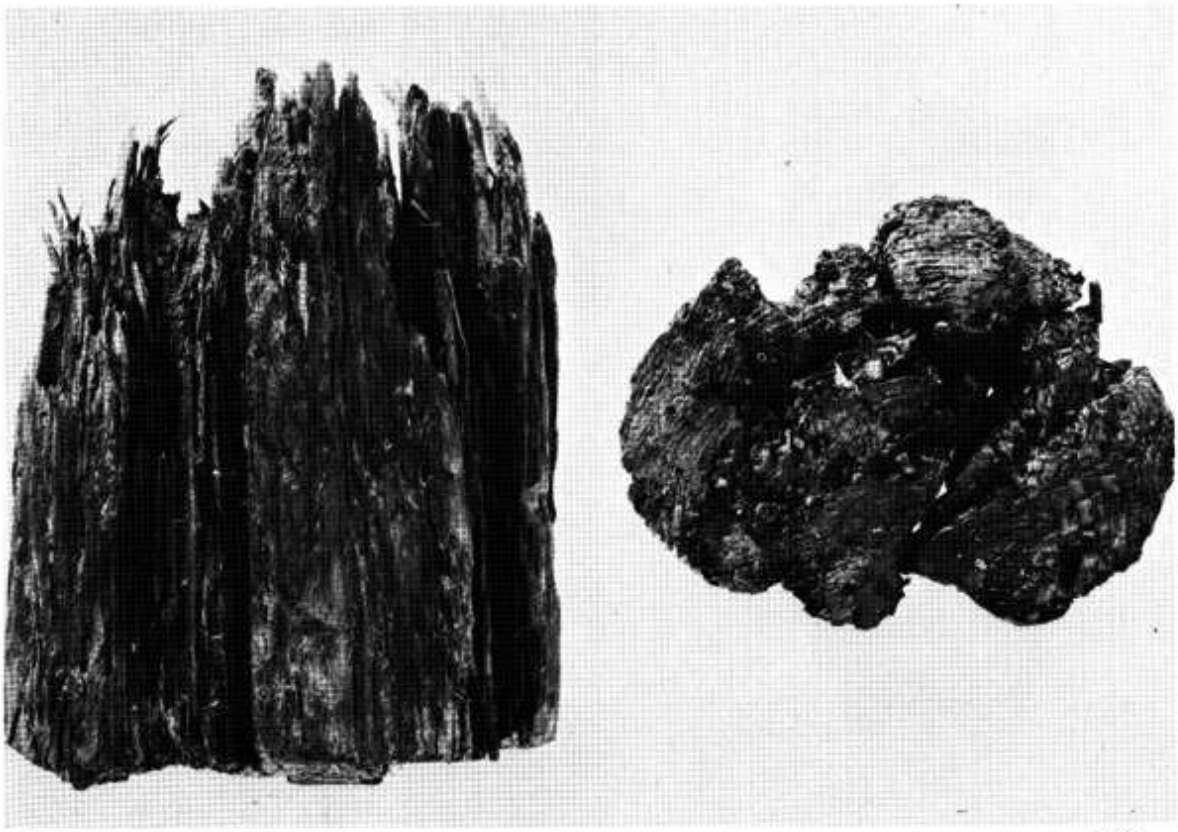


B地区第5トレンチ採集

# 図版十五　C地区出土遺物

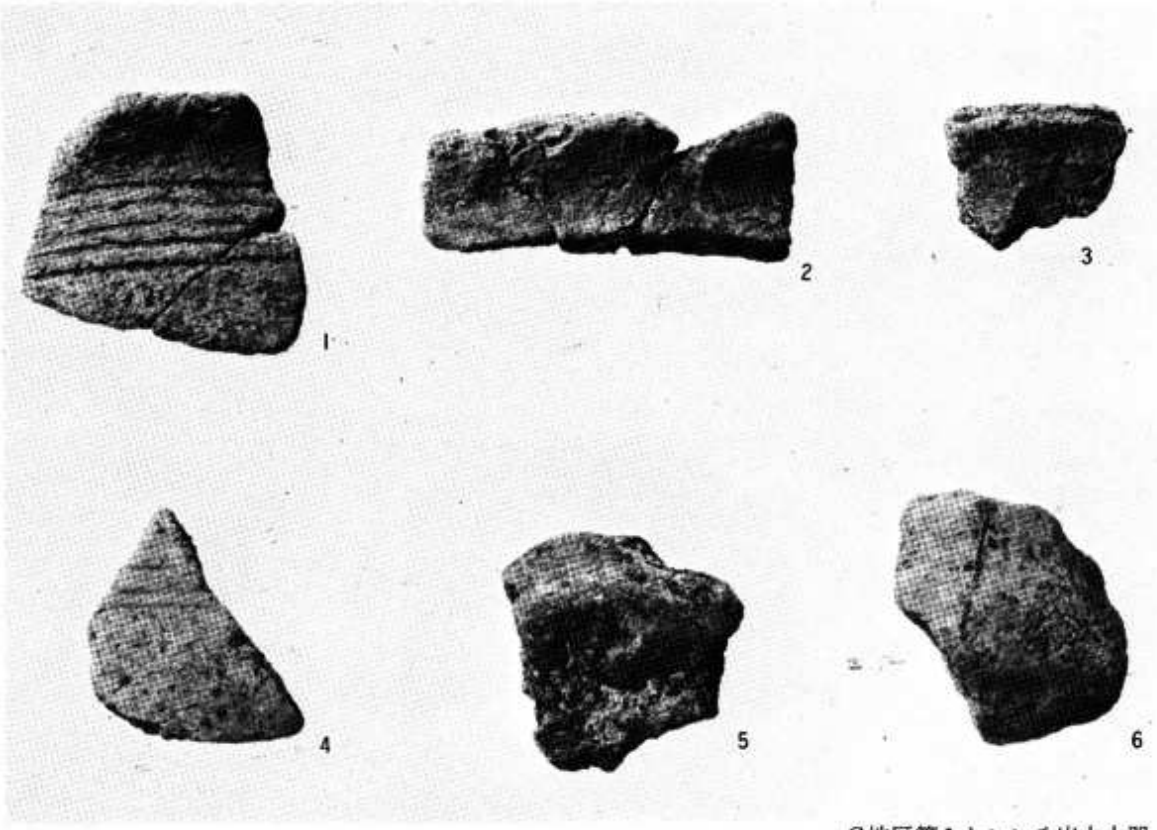


鉄鏃

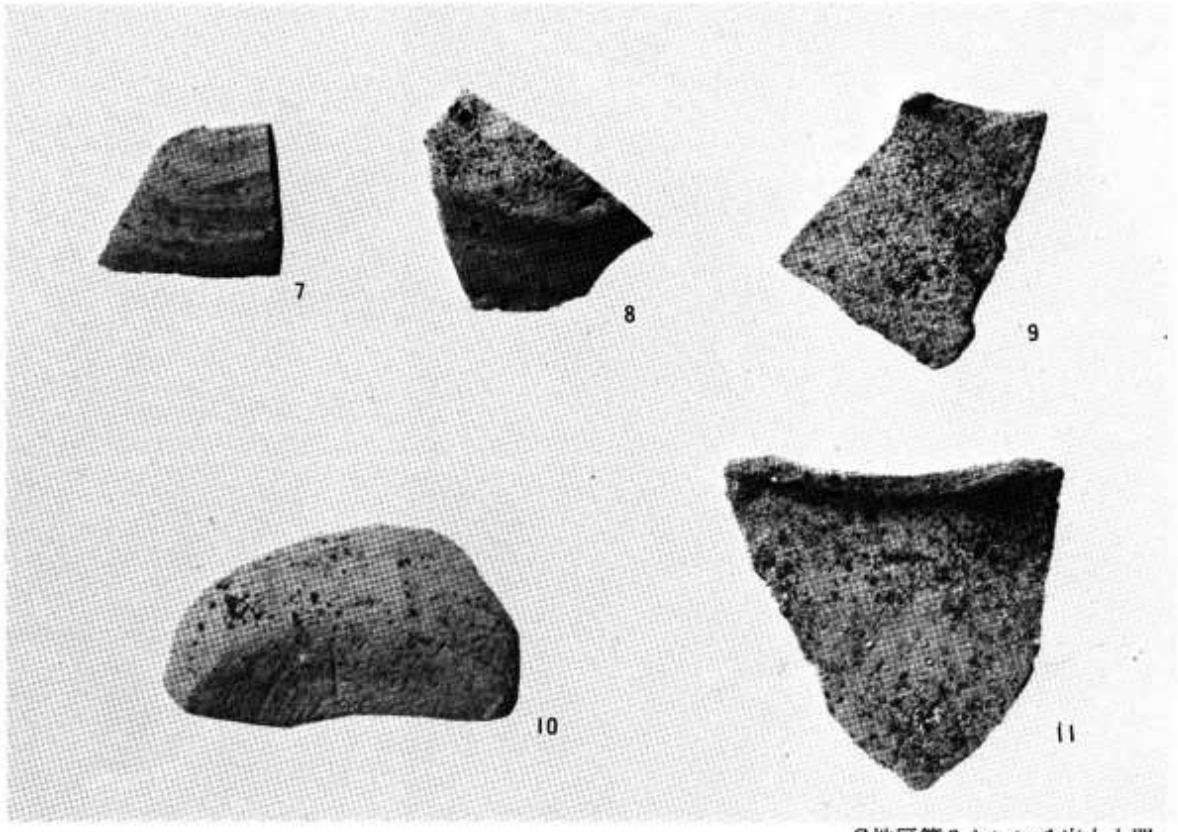


柱根

# 図版十六　C地区出土遺物

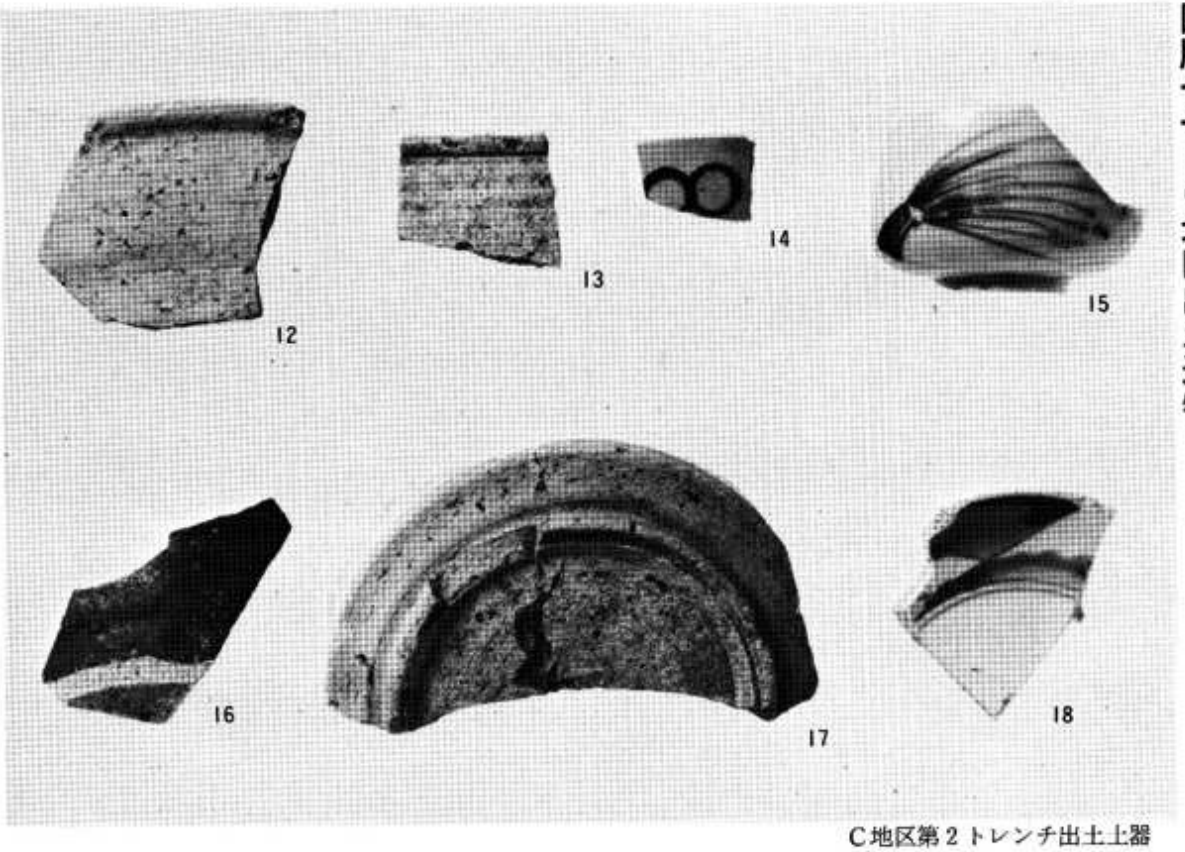



C地区第1トレンチ出土土器

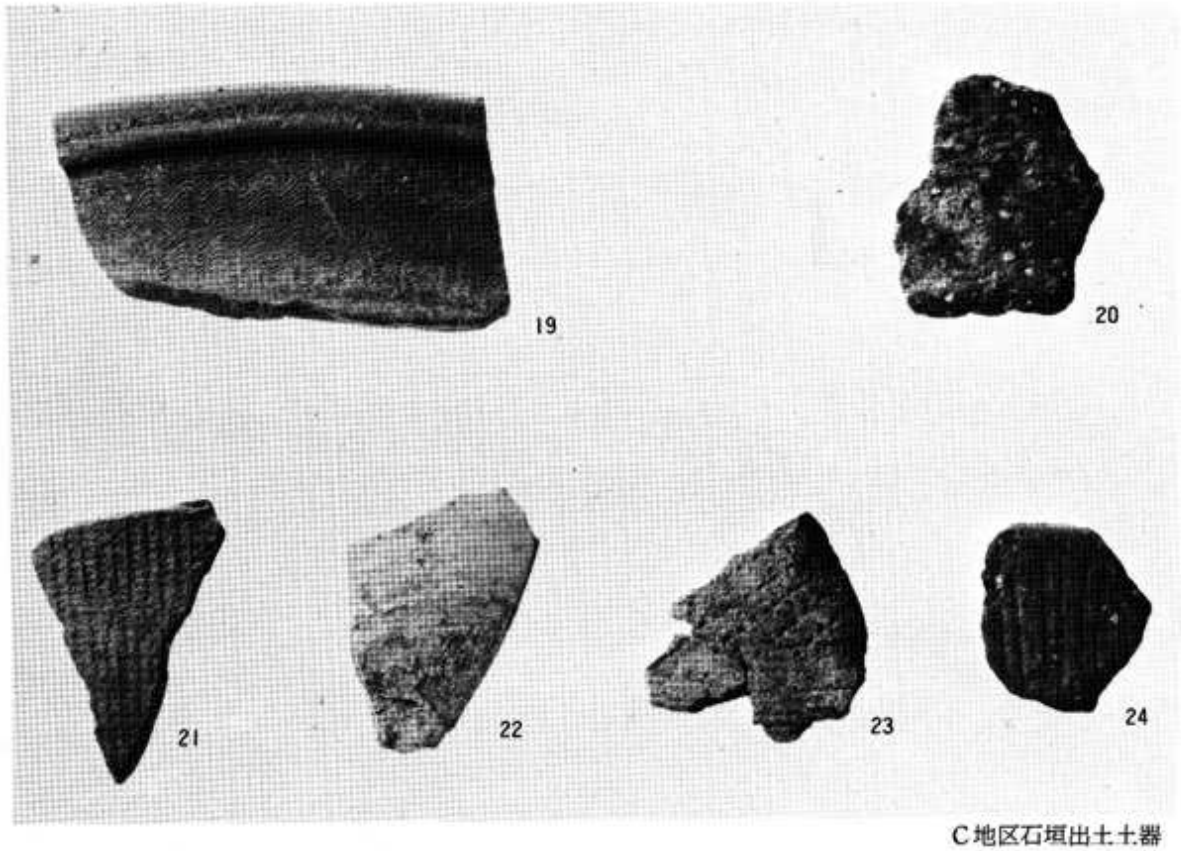



C地区第2トレンチ出土土器

# 図版十七　C地区出土遺物

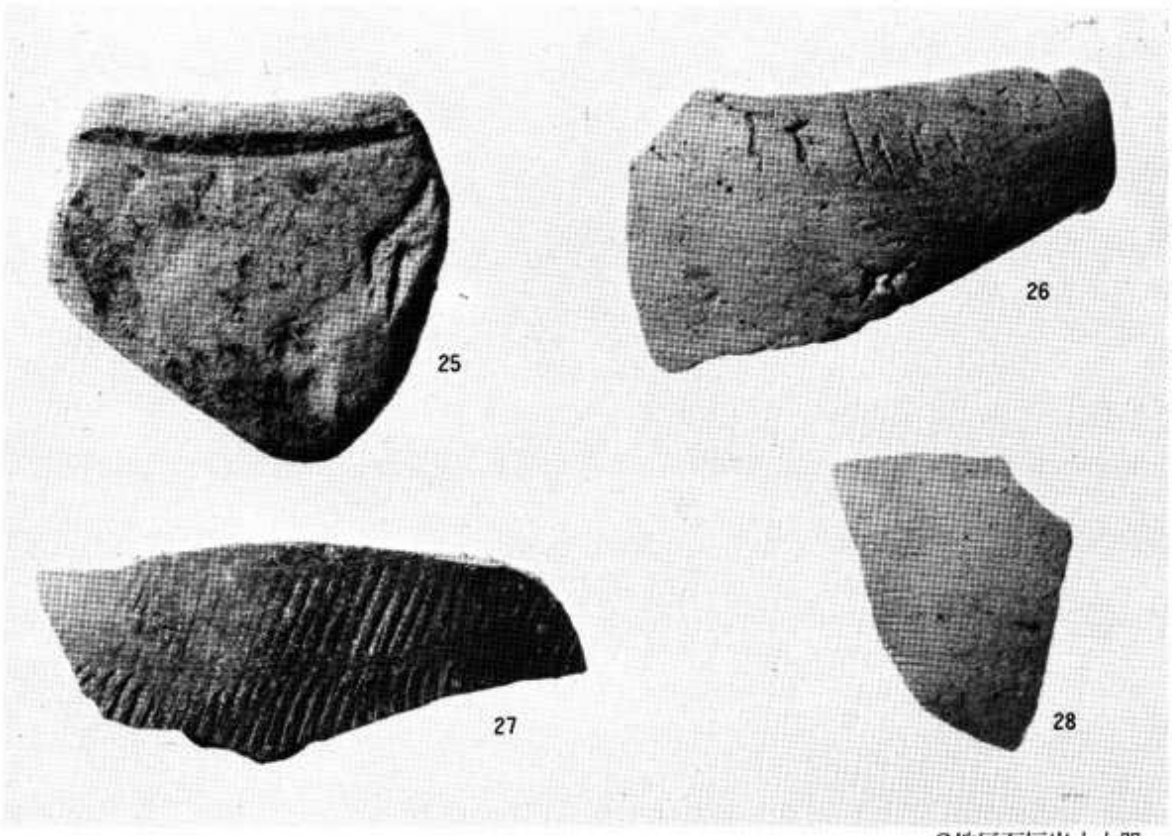



C地区第2トレンチ出土土器

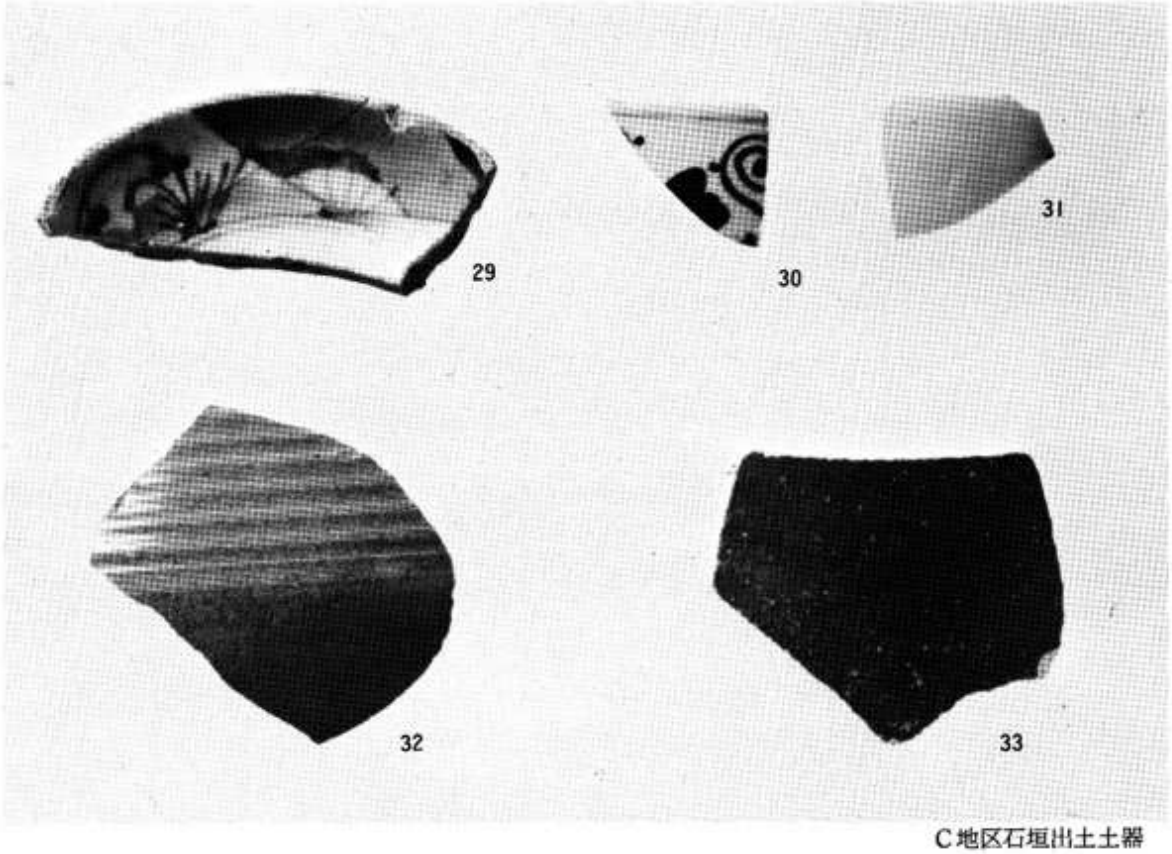



C地区石塀出土土器

# 図版十八　C地区出土遺物




C地区石垣出土土器




C地区石垣出土土器

# 図版十九　C地区遺物出土状況

C地区第1トレンチ鉄鏃出土状況

C地区第4トレンチ柱根出土状況

# 図版二十　C地区石垣

北隅（北より）

南隅（南より）

# 図版二十一　C地区石垣

北面

南面

**延勝寺湖底遺跡発掘調査報告書**

発 行 所　滋賀県教育委員会
　　㈶滋賀県文化財保護協会
　　大津市京町四丁目1-1
発 行 日　昭和60年3月
印 刷 所　宮川印刷株式会社
　　大津市富士見台3番18号